

325

235



始





325-235



# 禪の骨髄

秋野孝道著

大正  
4. 4. 5  
内交



序言

禪は玄學にあらず、奇解にあらず、密授にあらず、  
秘傳にあらず、即ち是れ衆生本有の性、元と是れ  
諸佛諸證の三昧なり。之れを得んと欲せば、專一  
に坐禪辨道せんことを要す。辨道の要路は、第一  
は志の堅固ならんこと、第二は正師を求めること、  
第三は光陰を惜むこと、志の堅固ならんこと  
とは、晝夜の時に拘はらず、寒暑の節を厭はず、徹



證せずんば決定して休まず、古今斯道の爲に辛  
鍊苦修せられしことを古鏡として照心すべし。  
次に正師を求めること、云ふは、修行若し正師  
を得ざれば、實に是れ勞して功なき也、祖師云く、  
正師を求むべし、正師を得ざれば學せざるにし  
かず、と正師を求むること、豈に容易ならんや、白  
隱禪師の正受老人に於けるが如く、東嶺和尚の  
鵠林老師に於けるが如く、常に正師に逢はんこ

とを祈るべし、次に光陰を惜むこと、云ふは、光  
陰を惜むは坐禪を惜むなり、時光の太だ速かな  
ることを顧ざるべからず、古人も行道は頭燃を  
救ふと示されたる如く、遅々たる華日も明窓下  
に坐して思ふべし、蕭々たる雨夜も白屋に坐し  
て忘るゝこと勿れ、と云ふが如く、唯是れ光陰を  
惜まんことを要す。如上の三件は辨道の要路な  
り、禪は唯是れ徹證にあるのみ。徹證とは衆生本



有の性に徹し、諸佛所證の三昧に承當するを云ふ。茲に予の從來講話せし閑言語を輯め來りて序せんことを求む、記して以て求に應ず。

大正四年涅槃忌の朝

駒澤學舎

秋野孝道識

目次

前篇 枯木龍吟

第一則	禪學の用心	一
第二則	參禪の覺悟	九
第三則	曹洞宗の安心	一八
第四則	禪の修養	三九
第五則	修養の心得	四七
第六則	禪の功用	五七
第七則	何をか生死と云ふ	六六
第八則	安心の根源	七〇
第九則	品性の修養	七六



第十則 洞門の禪戒 ..... 八二

### 中篇 體露金風

第一則 慕直に努力せよ ..... 一〇一

第二則 動靜一如の禪 ..... 一〇九

第三則 釋尊正傳の禪 ..... 一一四

第四則 正傳の禪と神通 ..... 一二一

第五則 佛誕生に就て ..... 一二七

第六則 修養實驗談 ..... 一三三

第七則 西有禪師の徳化 ..... 一四〇

第八則 脚跟下冷風生ず ..... 一五〇

第九則 佛教の根本義 ..... 一五八

第十則 萬法禪に歸す ..... 一六一

### 後篇 全提不起

第一則 一字不説の端的 ..... 一七三

第二則 臺山婆子の一著 ..... 一八五

第三則 趙州大死底の消息 ..... 二〇〇

第四則 正法眼藏涅槃妙心 ..... 二一一

第五則 佛と衆生と同か別か ..... 二一八

第六則 佛法は近きにある ..... 二二九

第七則 佛理に順ずる心 ..... 二三八

第八則 我相を離るゝの道 ..... 二四八

第九則 佛道は信を以て能入す ..... 二五四



前篇

枯木龍吟

碑の骨髄

第十則 禪と國民道德……………

四

二六六



## 一、禪學の用心

社會に何か變つた事件が起つて來て人心を刺戟する事が多いと言ふと、人間本性の自然の傾向と言ふものが、宗教に對する要求が熾んになつて來るものである。日清日露戦争が勃發して以來、宗教的心情が社會民衆の間に波立つて來た事は、隠す事の出ない事實であつて何人も認める處である。殊に禪の要求は一層高まつて來た、今度の世界の大動亂に付日英同盟の爲め遂に日獨戦争の止むなきこととなり、其れと同時に禪學も此の一般的潮流に驅られたと申すべきものか、禪と關係のある會合が彼處此處に催されるやうになり、禪的の著作物が古いものも新しいものも可なりの顧客があると言ふ事である。佛法のため禪宗のため誠に喜ばしい事であつて、此等の事柄が無爲に終らずして相當の結果を將來し、禪が人類のため國家社會のため貢献せん事が望ましいのである。



然し乍ら此處に注意を要するのは、禪的書物を幾程讀んでも、古則公案の提唱を百萬遍聞いても、其れて禪の第一義諦に安住する事は出來ないと言ふ事であつて、禪は文字言句の先には無いのである。禪宗一般の氣分として、教師や論師を餘り重寶がらない事や、禪を説く者が口癖のやうに禪宗の特徴を説破した言葉として引用する「不立文字、教外別傳」の由つて來る處は此處にあるのである。舌耕筆耕以上の或る者を重要視して立つた禪が、文字禪や口頭禪に墮落して仕舞つては嘆かましい事である。禪は直に心地を開明し、佛法の堂奥に參ずるのが其の要諦であつて、其には何より先に坐禪辨道に親しむの外は無ないのである。參禪學道は實に無上菩提を證得する處の此の上も無き妙術であつて、佛法の正門なのである。高祖大師の御言葉に「學道の最要は坐禪これ第一なり」とある。

即ち先づ正師家に參ずることが必要である、身體上精神上師家の如何に依りて、佛法が手に入り又は入らぬ事があるので、高祖大師も「機は良材の如く師は工匠に似たり、縦ひ良材たりとも良工を得ざれば奇麗未だ彰れず、縦ひ曲木と雖も好手に遇はゞ妙好忽ち現んず、師の正邪に依りて悟の眞偽あり」と、御示しがある、參禪せんと欲せば正師に參ずることを心掛ねばならぬ。

次には菩提心を起す事が大切である、如淨禪師も學道は道心を先となすと云はれた妄想分別を遣ふして道を獲得する事は思ひもよらぬ事である、佛法の關門は非常に堅固にして容易には通ふさんのである。此の堅固なる門を開くには鍵を要することである、所謂其の鍵とは正信のことである、正信起らざれば佛道にはならぬ、萬事無駄事となる、辨道話の中に

大凡諸佛の境界は不可思議なり、心識の及ぶべきにあらず、いはんや不信劣智の知ることを得んや。たゞ正信の大機のみよくいることを得るなり、不信の人はずとひをしふともうくべきことかたし。

と、信は道源功德の母であつて、無上正眞道を求むる宗教的崇高なる心を振ひ起す事



が何よりである。世の中には、禪は難解難入の宗旨であつて、鈍根劣機の凡夫には逆も及びもつかぬ次第であると云ふ人があるけれども、決してそうしたものには無いのである。禪は人を擇ばないので、如何なる人でも修行の如何に依つては超關脫落の時節はあるのであつて、頭腦が好いとか悪いとか、機根が人並み勝れて居るとか劣つて居るとかには關係しないのである。人天界の世智辯才の如きは出世の船航とはならないのである。其れだからして普勸坐禪儀の中に

上智下愚を論ぜず、利人鈍者を簡ぶ事莫れ、專一に功夫せば、正に是れ辨道なり。と、證明せられてある。

經には正像末の三時を立つけれども法の上には三時はない、只機類の上には於ては正像末の三時が立つのである。正像末の三時を楯に取つて兎や角言ふ人があるけれども、此は正像末を誤解して居るのに基くのである。正像末は地球の自轉や、公轉の數量の多少に従つて到來する不動の客觀的存在物では無いので、全く衆生の精神に存する

のである。然れば釋尊の御在世にも末法澆信の衆生あり、現世釋迦大師の涅槃を隔つる時に於ても、正法厚信の大機ありと言ふ譯合であつて、時間に制限されしものでは無いのである。正法眼藏隨聞記の中に

佛教に正像末を立つる事暫く一途の方便なり。在世の比丘必ずしも皆すぐれたるにあらず。不可思議に希有にあさましく下根なるもありき。故に佛け種々の戒法等を設け給ふこと皆わろき衆生下根の爲なり。人々皆佛法の器なり。かならず非器なりと思ふことなかれ、依行せば必ず證を得べきなり。

と、仰せられてあるのは此處の事で、佛法の第一義諦を明め、人々本具の寶藏を打開するの能不能は、如來在世を去る時間の長短や、利鈍淺深の如何によつて左右さるゝものには無くして、佛法の爲めに佛法を求むる道心を發して道に慕進するか、せないかに倚るのである。無上道を求むる心を發する發せないは、有漏地より無漏地に入るの龍門なのであつて、道元禪師は學道用心集の開卷第一に此の事を切に勧められて居



らるゝ程である。

然らば其の道心とは何かと言ふと、三界六道の輪廻の羈絆であるところの吾我名利の念を脱却し、一切の妄執を離れて、身命も惜まず、佛道の爲めに佛道を修する、此の心操を發するには無常を觀する事が肝腎であつて、觀無常の心是れ道心の根本と言つても好い程である、龍樹祖師は

唯だ世間生滅無常を觀する心も亦菩提心と名く。

と言明されてある位である。眞に無常を觀する心是れ道心である、兎角世の中の人は此の世は無常變遷定りなきものと知りつゝも、此を切實に感じて其れに處するの道を考へることが誠に少いのである、形質は草露の如く、運命は電光の如くである。朝に道を聽て夕に死すとも可なりて、道を離れて長壽を保つより、道に由りて早く死せん方が人を感化するのである。

年は老らうと思つても、人間の自由自儘に老る事が出來ないと言ふ事が眞理である

と同時に、年は老るまいと思つても、老るものであると言ふ事も理に合して居るのである。昔時から光陰は矢の如しと言つてあるが、光陰は彈丸の如くである、日月の歩み何者よりも速く、吾等が遊惰放逸にして過して居るからと言つて停まつて待つて居る譯でも無いのである。其れのみで無く、幸に有り難き人身を受けたりと雖、此の五蘊和合の身體、生滅流轉限り無く、一刹那／＼に世相に遷されて居るのである。老病死滅の變轉の常なき今更ら詳細に説明の勞を取らなくとも、誰人も承知して居る處であつて、釋尊の聖、孔子の徳を以てしても、金骨鐵肉に非ざる限りは、何時かは生命の末期は到來するのである。

石頭祖師が學人に向つて、光陰空しく渡る事勿れと親訓を残されたのも、意味深く光陰を惜むは坐禪を惜むなり、坐禪を惜むは光陰を惜むなり、光陰空しく過ぐるにあらずして人が空しく過ぐるのである。切に思ふて、寸陰を分陰にして今日今生を意義あるものになくしてはならない。たとひ道ありて死するとも、道なくして生くるこ



となかれと言ふ聖言は、佛道に志すと志さざるとに論なく、何人も徹底味合つて常に體得すべき箴言であつて、自己の身命も抛捨し、道は重く身命は輕さの心を以て、道の爲めに躍進しなくてはならない。古來竹の聲を聞いて道を悟り、挑花の色を見て心を明めたる道人ありと雖、這箇の田地に到り、大道を吾がものにするのには、普通大抵の事では無く、道心を先さとなし光陰を惜み功夫辨道に身命を捨たからである。唯何と言ふ事も無く、竹の聲を聞き、又は花の色を見て心地を開明する事が出来るものでありとするなら、山寺の小僧や、花屋の丁稚は何日でも得道の鐵漢でなくてはならない筈である。時光を惜み、學道用心の功夫あるを看取すべきである。佛だから言つて生れ乍らにして佛である譯も無く、聖人と雖も母胎を分れると直に聖人となられた次第でも無いのであつて、古語に所謂、倉に住む鼠食に飢へ、田を耕す牛草に飽かずの言辭の如く、人々道中にあり乍ら食に飢へ、草に飽かざるは修行の無いのに基くのである。折角佛道に縁を結びたる者は、時光の甚だ迅速なることを恐れ、遅々たる華

日も明窓に坐して思ふべし、蕭々たる雨夜も白屋に坐して忘ること勿れ、分陰を惜み道心を専らにして、端坐參禪の勝蹟を慕ひ以て通天徹地の妙境界に安住すべきである。辨道の用心多種ありと雖、今は此れ以て肝要の事とするのである。  
多く得道することみな坐禪の力なり。

と、あるのは確かに證明であつて、端坐を外にして佛之知見を明らむる事は難中の難事である。然うかと言つて痴の如く、愚の如く滅多矢鱈に坐つてさへ居れば、期せずして見佛の境界に入る事が出来るかと言ふに、其の様には行かないのであつて、種々の方面からの用心が肝要なのである。

## 二、參禪の覺悟

凡そ佛敎の如何なるものかを知らんと欲せば、深く入つて其意義を會得せねばならぬ。佛敎は元來人生にかけ離れたものではない。吾人が手の舞ひ、足の踏むところ、



即ち日用光中、行住坐臥、寸時だも離るべからざるは申すまでもなく、所謂心身に充満彌淪せねば、眞に佛法を得た人とは云へぬのである。

世には口にのみ佛教を説き、筆にのみ大法を書く人が多し、筆舌必ずしも悪いと云ふ譯ではないが、世に云ふ「論語讀みの論語知らず」ては何もならぬ。平素の造次顛沛悉く佛法の上の往來でなくてはならぬのである。

然らば如何にして佛法を得るかと云ふことは、深く心根を傾けて、第二念に住せざる様注意が肝要である。この點に於て多く事を求むるよりも、同一の事でも度々聞いて、充分に知得する必要があらうと思ふ。

されば古人も左様云うて居る、遠く求めるには及ばぬ。近きところより參究せねばならぬと。然らば吾人に一番近きものは何であらう、眼に最も近き眉毛の見る能はざる如く、それ以上近くとも容易に知ることの出來得ぬものがある、それは何であるかと云ふに吾人の心である。

凡そこの心を知らんと欲せば、如何しても信念を得ねばならぬ、信念を得るには第一に坐禪をするにある、佛の教を信するにある。修業に於ける師家即ち指導者を信するにある。かくして心性を徹見するの秋が大悟發明を得るのであると、古人も示された。かゝる信念さへあれば自己の心性が知れぬと云ふことはない筈である。

有名な太梅山の法常禪師は馬祖道一禪師に就いて修業をした人である。一日馬祖に問ふて曰く「如何なるか是れ佛」答へて曰く「即心即佛」と、法常禪師言下に省發するところあり、直ちに太梅山に籠つて坐禪をして居られた。馬祖は其道力を試みんがため、一日僧を遣はした。僧萬事胸中に藏めて太梅山に到り「貴僧は曾つて馬祖に參得せられたさうであるが、如何にして大悟することを得しや」と問ふた、法常禪師は少しも飾らず「余は即心即佛の語を會得せり」と答へたのである。すると件の僧はこれぞと謂はんばかりに、馬祖今日の佛法は貴僧に示された事とは全く反對である、今日では「非心非佛と謂うて居る」返答如何にと云はんばかりに其顔を窺き見る、時に



法常禪師は從容として「馬祖今日尙ほ斯くして人を弄するや、他はさもあらばあれ吾は此間に在つて即心即佛」と、少しも動ずるの色がなかつた。これは物に大丈夫になつて居るからである、僧馬祖に右の趣を語つた、馬祖拍手一番「梅子熟せり」と云はれたので改めて印可證明せられたのである。

曹洞宗の開祖承陽大師が支那天童山如淨禪師の會下にあつて御修業の折、一日多くの大衆が後夜の坐禪に睡眠して居る有様を見られた、如淨禪師は大喝一聲「參禪は須く身心脱落なるべし、只管打睡して什麼をなすにか堪へん」と、承陽大師傍に在つて此御言葉を聽き豁然として大悟あらせられたるが如きは、其師を信ずる點に於て、坐禪を信ずる點に於て、佛法を信ずるの勇猛精進は實にかうなくてはならぬのである。又曹洞宗の太祖常濟大師の如き多年苦修練行、終に「平常心是道」なる事を省悟せられた、時に其師徹通禪師は「未在更に道へ」と云はれたので、太祖禪師は「茶に逢ふては茶を喫し、飯に逢ふては飯を喫す」と、かくして師の印可を受けられたのであ

る。それよりますます奮勵工夫に努めたる如き、堅き信念に基く所以と謂はねばならぬ。

斯の如き事例は他にもあるのであるが、畢竟するに自己の心を徹見せねばならぬのである。

然るに今日の佛教界を眺むるに、或は玄と説き、妙と談ずる人は多い、乍併、玄妙を明らめ、修證を得て居る人は至つて少ないやうに思ふ。佛祖は之を明らめ、之を得て居る、故に應化接物自由自在になるのである。

これ即ち、佛法そのものが自己と一枚にならねばならぬ、自分の道具でも人のものでは役に立たぬ、自分のものではなくては自由に使ひ得るものでない。

故に其指導者たる宗師家分上の人、抑揚、頓挫、把住、放行、殺活自在、與奪自由底の機用がなくてはならぬ、一切藏經を繰り返すとも其功力はこれに外ならぬのである。多くの求道者には、鈍根あり、利根あり、人々顔の異なる如く機根に差別は免れ



ぬ次第、さればかゝる事は單に宗師家のみに止まらずして、一家の主人公も同じ事である。日々家族に對するにも、或る時は賞め、或る時は怒り、或る時は之を嚴にし、或る時は之を緩にする、この機用がなくてはならぬ。よし其職業は各自異なつても、商業家は商法上に於て、工業家は工業上に於て、百姓は農業の上に於て、教育家は教育上に於て、單調なる行動ばかりでは眞に其職責を全うし得るものではない、人事百般機に應じ、物に随つて抑揚頓挫がなくてはならぬのである。

かゝる大機大用を得やうとするには、自己が確固不動の信念に住してかゝらねばならぬ。其信念は飽迄も宗教に求めねばならぬのである。これに就いて思ひ起さるゝ話がある。

支那に有名なる三聖和尚、會つて雪峯禪師の會下でありし時、一日問を發して曰く「網を透る金鱗未審かし何を以てか食とせん」と云はれた。三聖は臨濟大師の衣鉢を嗣いだ年少氣鋭の活衲僧である、臨濟末後に臨んで、我が亡き後は正法眼藏を滅却す

る勿れ」と枕邊に三聖を呼んで懇ろに頼んだ、三聖答へて曰く「御心配には及びませぬ」然らば一句を道へ「三聖言下に「喝!!」と叫んだ、この大喝一聲は支那四百餘州に響き渡つた事であらう、臨濟即ち謂つて曰く「吾が正法眼藏箇の轄驢邊に於て滅却し了んぬ」と口では云ふたが意の中の喜びは如何ばかりぞ、これを禪門では「句抑下の意卓上」と稱するのである。徳川三代將軍が家康公の御下問に對し「天下大いに亂れり」と云ふて徹賞せられし如く、一點の油斷がない、茲に妙味の存するを心得ねばならぬ。

今は此三聖と雪峯との問答であるから面白い。雪峯は氣鋒の峻烈を以て聞えた徳山和尚の法嗣である。然るに雪峯は師の膝下に於て悟れず、三登投子九至洞山と云ふて投子禪師に實參する事三回、洞山には九度も參じて而も未だ悟る事能はず、終に卍字巴と降りしきる雪掻き分けて、山上に登り結跏三昧を續けて大悟徹底したと云ふ。

世に雪峰位の修行を重ねた人は多くないのである。さればわが承陽大師の如きも、



眼藏の中に於て非常に賞揚してある、而も雪峰は峻嚴なる家風に於て徳山に譲らない一例を揚ぐれば、

曾つて洞山大師の會下に在つて典座（食事司）の役をいたしつゝありし折、一日飯米を淘て居つた、時に洞山大師問ふて曰く「米を淘り去て沙か、沙を淘り去て米か」古人の親切なる米を洗ふ、一舉手、一投足にも悉く法に親しい雪峰年少氣鋭、即時に「沙米一時に去る」と答へた。大師は「大衆この何をか喫せん」米も去り沙も去つて、多くの僧侶に何を食はす積りかと謂はれたさうであるが、雪峰の氣象はこれ丈けても略察せらるゝのである。

然るに今日三聖に對した時は、最早寄る年波に大分練れて來て居る、角も取れて來た、所謂老熟の境に達したのである。一方三聖はまだ若い、若い勢ひで雪峰に向つて來た。今日吾れ三聖即ち潑刺なる金鱗が網を透つて來た、今日以後何を以て食といたしたものであらう。千波萬波を横切つて居る魚族も網の中では動きが取れぬ、空中

を自由自在に飛び廻る鳥類でも籠の中では何ともならぬ。

世の中には随分いろ／＼の網がある、平穩無事に過さるゝ結構な日常を、或は哲學である、科學である、といろんな網に引懸つて、苦んで居る人が存外多いやうだ、何も哲學や科學が悪いと云ふ譯ではない。宗教の方面でも同じく、學問の網、悟りの網種々様々の網に苦められて居るやうであるが、今日世間の人が多く引懸り易い網は多く慾と云ふ網だ、同じ慾でも大別すれば、第一財慾、第二色慾、第三食慾、第四名慾、第五睡慾、人間萬事金の世の中、金故に命を取る者、取らるゝ者、仁義五常も金のためには何の役にもたゝぬ有様である。次に色慾これには若い男女の如き特に引掛る者が多い、次に食慾も醫者さんの話を聞くと、病氣の原因は多く食物に依るとの事である。是等は日常の、何でもなき事のやうに思ふが決して油斷はならぬ、別に金が悪いの、女が要らぬの、食物を取るなのと云ふ譯ではないが、注意をせぬと網に引掛る。次には名の網であるが、之も恐ろしい、名譽を欲しいばかりで妻や眷屬、財産迄悉く



捨る人は決して少くない。次に睡慾、朝寢の網には誰も引掛る、悪いと云ふ事は知りつゝ引掛る人が多い、明朝よりは早く起やうと、思うても偕て夜が明けると矢張睡い今朝丈け御免蒙つて明朝からにせやうと又夜具の中に頭を入れる、えい今月は最早幾日もない來月からにせやう、面倒だ今年も残り少ない來年からと、つい一生涯この網を抜ける事が出来ないで了ふ。

以上は多く人の引掛り易い網であるが、達人はこの網を切り抜かねばならぬ、鳥の空を行くが如く、魚の水中を游泳するが如き有様でなければ眞物とは稱されぬのである。

### 三、曹洞宗の安心

#### 一 序言

今日は哲學であるとか、科學であるとか云ふて、世間の學問が非常に進んで來たに

つれて、佛教學者の方に於ても其の説明講話と云ふ事を、大分學問的にすると云ふ傾向になつて來たのでありますが、併し説明の方法として、或る程度まで、今日の學問の形式を借りると云ふことは必要であるが、元來が宗教は學問でない、理窟でないから、説明が如何に巧妙であつたにしても、理論が如何に緻密に行き渡つて居たにしても、そのみを以て宗教の眞の面目を發揮されるものではない。元來宗教に於ては、文字や言説を以つては到底説明の出來ない部分があることを知らねばならぬ。これが宗教の價値のあるところで、これが宗教の特色で、宗教が學問に異なるところであつて、又如何なる時代に於いても宗教の必要を感ずる根本要素となるところのものである。

#### 二 信 仰

廣い話は暫く置いて、吾が佛敎の目的は理論の上より宇宙及人生を解釋すると云ふものではない。即ち自己の身心を根本より解脱して、これを實行の上に活現すると云

#### 三、曹洞宗の安心



ふにあるのである。言葉を換へて云はゞ、自己の身心を決擇するにあるのだ。即ち安心を得るのが佛教の目的である。故に佛法に於ては、彼の疑を以て順次に研究すると云ふ學問とは丁度正反對に、第一に信仰と云ふことが大切である。信仰がなかつたならば、その人は安心立命することの出来ないのは言はずもがな、既に佛教徒としての資格のないものであることは納の言を待たない次第である。信仰は入道の始めてあつて又終りである。故に佛も「佛法の大海は信を以て能入となす」と示され、又「華嚴經」には、信は能く智の功德を増長す、信あらば能く必らず如来地に到る、信は諸根をして明淨ならしむ、信力堅固なればよく壞するものなし」と又「金剛經」にも「信心清淨なれば則ち實相を生ず」と又は「華嚴經」には「信は道元功德の母たり、一切諸の善法を長養す」とある。

斯くの如くにして信仰は入道の第一義であつて、又修行の根底をなすものである。曹洞宗の宗要とても亦然り、先づ第一にこの信仰を起すと云ふことが大切である、依

つて道元禪師も辨道話の中に「おほよそ諸佛の境界は不可思議なり、心識の及ぶべきにあらず、況んや不信劣知のしることをえんや。たゞ正信の大機のみしることをうるなり、不信のひとはたとひ教ゆとも得べきことなし。(中略)おほよそ心に正信おこらば修行し參學すべし、しかあらざればしばらくやむべし」と、懇ろに示されてある。又指月和尚も戒法の根源とするところは「唯信のみ」と示されてある。安心の第一歩は即ち信仰である、發心正しからざれば萬行虚しく施すて、此の信仰即ち發心するところが先づ第一であることは吾が禪門のみならず、恐らく通佛教皆なそうであらうと思ふ。

三 宗要の二方面

吾宗安心の要旨は禪戒一如なりと雖ども、且らく分つて二部門となすことが出來得るのである。第一は受戒門で、第二は坐禪門である、何故に受戒が第一であるかと申すと、受戒は入道の根基にして坐禪は佛法の修證であるからである。此の二つは吾宗

三、曹洞宗の安心



安心の骨子となるところのものであるから、今此の二方面に就いて、一應言はんとす。

四 禪

禪とは日本語でも支那語でもない、梵語の音譯禪那の略稱であつて、これを意譯して靜慮と云ふのである。禪なる思想は佛教全體に行き渡つて居る。古來佛教を大部分に、戒定慧の三つに分けてある。又聲聞の修行の本科とするところの四諦の中にも禪はある。菩薩の修行の六度の中にも禪はある。何れにしても吾人の妄念妄慮を靜めると云ふ點に到つては皆一つである、併し今日達磨傳來の禪は彼の三學中の定をさすのでも無ければ、四諦の中の禪を云ふのでもなければ、又六度中の禪を云ふのでもない況んや儒教の靜坐や、外道の禪を指すものでない。

五 達磨傳來の禪

六祖より六代目の圭峰宗密禪師は坐禪の種類を分つて

外道禪

凡夫禪

小乘禪

大乘禪

如來最上乘の禪

と區別して居るが、元來禪そのものは、左様に種々に區別さるべきものでも無からうが、暫くこれを借りて云はゞ、如來最上乘の禪とも云ふべきである、即ち前述の如く六度中の禪でも四諦中の禪でもなく、之等を含んでゐる廣大無邊なるものである。

六 坐禪の必用

見來れば宇宙は皆禪の現はれてあつて禪は即ち佛法の異名である、高祖が「坐禪儀」に「道本圓通、宗乘自在」と示されたるが如く、一物として佛法の外のものはない、吾々御互は皆な佛法の中に在つて遊泳しつゝあるのであることは、例へば魚が水中にある如くであるが、只人々がそれを知らずに居るまでのものである。故に洞山和尚も如

三、曹洞宗の安心



何なるか是れ佛と云ふの間に對しては、麻三斤と答へられ、趙州は庭前の柏樹子を以て答へられて居る、眼見耳聞慘漏無く、松吹く風も柳を染むる色も、皆な佛法の露現ならざるはないのである。吾人がそれを知らざるは、これ佛法の中に居つて佛法を知らざるまでの事である。

斯くの如くにして佛法は宇宙に充滿し吾人の到る處築著磕著なりとせば、然らば修行は要らないかと云ふに、決してさうではない、そこに修行と云ふことを大切になつて來るのである。佛法は宇宙に一杯にはなつては居るが、其の一杯の佛法を知らずに居るものもあれば、又佛法と眞に親しくなつて、擧手投足の上に佛法を活用するところが出来る人もある。凡と聖との差はこれより起るのである。高祖大師は「この法は人々分上ゆたかに具はれりと雖ども、修せざるには顯はれず、證せざるには得ること無し」と云ひ、又「然れども毫釐も差あれば天地はるかに隔る」と示めされてある吾々は修行と云ふ事が最も大切であつて、坐禪の目的は一言に云はゞ佛法の體現にある。

るのである。佛と親しくなり道と親しくなりて、自分が佛となり道の全體となるのである。

七 坐禪の儀則

そこで、吾宗修行の第一義は坐禪であつて、元來禪は必ずしも、坐を要しない、永嘉大師は「行も禪、坐も亦禪、語默動靜體安然」と言はれ、又承陽大師も「豈坐臥に拘はらんや」と示されてある通り、行住坐臥が眞に寂靜の境を離れなかつたならば、皆禪である。けれども初心修行の方法としては、先づ坐禪が最も適切である。

坐禪の方式を示さば、先づ坐禪をするには身體を調へねばならぬ、身體を調へる第一の要領は衣食住に注意せなければならぬ。高祖大師の坐禪儀にも「靜室宜しく」とある、何れにしても坐禪をするには喧騒な町中や、歌舞の聲ある所にては出來ぬ。次に「飲食節あり」と示され、食物等も適當に節することが必用である。又衣帶なども緩くしめて、而して、尋常に坐處には厚く坐物を敷き、その上に經一尺二寸、圍三尺



六寸の普通に坐蒲と云ふ、それを敷きて坐るのである。坐法には結跏趺坐と半跏趺坐との二つがある。結跏趺坐にも、吉祥坐と降魔坐との二つある。(詳しくは坐禪儀にあり略す)斯くして、或は結跏趺坐でも半跏趺坐でもよろしいが、成るべく結跏趺坐を要す、脊梁骨を直立し、耳と肩と對し、鼻と臍と對せしめ、次に右の手を左の足の上に安じ、左の掌を右の掌の上に安じ、兩方の大姆指を面へて相柱ふるのである。斯の如く正身端坐して、次に舌は上の顎にかけ、唇齒相着け、目は常に開いて、身相既に全く調つた時に到つて、左右搖振して、大盤石の如くに坐定するのである。

さて身相既に調つた上にて、心相を調へねばならぬ、如何に調へるかと云ふと「箇の不思議底を思量せよ、不思議底如何が思量せん、非思量是れ即ち坐禪の要術なり」と、坐禪儀に示されてある通り、吾人が端坐の當體謂ゆる有心と無心とを超越するのである、有心は散亂に涉り、無心は昏沈を生ずる、有心ならば凡夫禪となり、無心ならば死灰枯木の禪に墮る、有心は生に迷ひ、無心は死に沈む、思量も病なれば不思議

も病である。依つて不思議底を思量するとある。其様子を非思量と云ふので、山川草木皆これ其のまゝが非思量の露現である。迷悟凡聖の累縛がない、吾人が坐禪する當體直に凡聖迷悟の論量を超越し、直下に第二人無きに到る。此の處を非思量と云ふたので、こゝは人々冷暖自知で、他の説明に預るべきでない、眞個非思量の當體に到り得るならば、直にこれ佛法を吾物としたと云ふべきである。萬法と自己とが一體になり、主觀と客觀とが、即世界と吾れとが全く一になつたところを云ふたのである。

八 坐禪の目的

坐禪の目的は開悟にあるが、悟と云つたとて、別に變つた様子を云ふのでなく、眞個此の非思量の境涯に體達して、行住坐臥が、眞に非思量を離れなかつたならば、その人は吾禪門に於て直に安心立命の人と云はれやう、此の非思量が直に實際の場合に應用されるならば、これを眞個に大悟底の人と云ふべきである。此に於て、平常心是れ道と、日々の行持の上によく禪の活用を現し、佛作佛行となつて現はれるのである



依つて高祖大師は正法眼藏に「佛法を習ふと云ふは自己を習ふなり、自己を習ふと云ふは自己を忘るゝなり、自己を忘ると云ふは萬法に證せらるゝなり、萬法に證せらるゝと云ふは、自己の身心及他己の身心を脱落せしむるなり」と、示されてある。元來坐禪は開悟の手段ではなくて、坐禪は開悟そのものである、坐禪が目的でなければならぬ。高祖大師は「坐禪は習禪にあらず、安樂の法門なり」と、示されてある通り、吾人が端坐の正當には、戒定慧の徳も六度の徳も、乃至一切の功德も此中に含まれて居るのである、即ち坐禪は菩提を究盡する修證でなければならぬのである。依つて高祖大師は、辨道話の中に「もし人一時なりとも三業に佛印を標し、三昧に端坐するとき、遍法界みな佛印となり、盡虚空ごとくさととりとなる」と、云はれてある。坐禪は實に三昧中の王三昧にして、其の功德は廣大無邊である。

九 戒

宗門に肝要とするところは二つには、戒法である。戒法は梵には尸羅と云ひ、漢には

清淨と云ふ、又は智度論には、沒粟多とある漢には制と云ふ、即ち制限の意味である又は調伏とも云ふ、三業を調伏して惡を作さしめざるが故に云ふのである、又律とも云うて、律は法である。出世間の禁制を云うたのであつて、要するに戒は最初佛弟子中に、道ならぬ事をするものがありし故に、佛が次第に禁制せられたる條目であつて今日に到つては、比丘の二百五十戒、比丘尼には五百戒乃至八萬の細行と、澤山になつて居る。而して又後世に到つては、戒にも多般の種別を付けられ、或は人天乘の戒或は聲聞小乘の戒、或は菩薩一乘の戒など、澤山にある。

十 戒源

これは事相上の由來であるが、戒本來の理體の上から見れば、戒の源は天地と共にあるのである。元來天地は無始無終のものであるとして見れば、戒も又無始無終のものでなければならぬ。例へば天に在つては日月星辰、地に在つては森羅萬象、此の間に一定の條理整然として一點味すすところなく、一絲亂るゝところがない。斯く



の如くにして戒の始めもなければ、終りもない。古の古を盡し、後の後を盡して居るのである。依つて指月和尙も「戒源は云ふべからず、若し之れが始めを見れば、未だ眞際となさず」とある。併し乍ら今是を人界に應用し、始終相續し起居動靜に配する時に到つて、戒脈と云ふものが現はれ授受と云ふ事が行はれる事になるのである。依つて茲に戒法の授受と云ふ事が大切になつて來るのである。先佛斯くの如くにして授け後佛斯くの如くにして受け、佛々相傳、祖々相承して今日に到つたのである。

十一 禪戒

さて斯やうに戒法と云ふものは今日に傳はり、其の種類も中々澤山であるが、吾曹洞宗に於いては「瓔珞經」及び「梵網經」に依つて、三歸戒、三聚淨戒、十重禁戒これ十六條戒と云つて、此の十六條の戒法を特に禪戒と云ふて、信仰門の標準と成つて居るのである。何故に禪戒と特に云ふかと云ふ事に付いては「禪戒訣注解」に「曰く吾れ禪に家す、故に戒も亦禪の名を得たり、猶ほ圓頓の家は、戒も亦圓頓の名ある

が如し」とある、禪宗で立つる戒なるが故に禪戒と云ふのである。

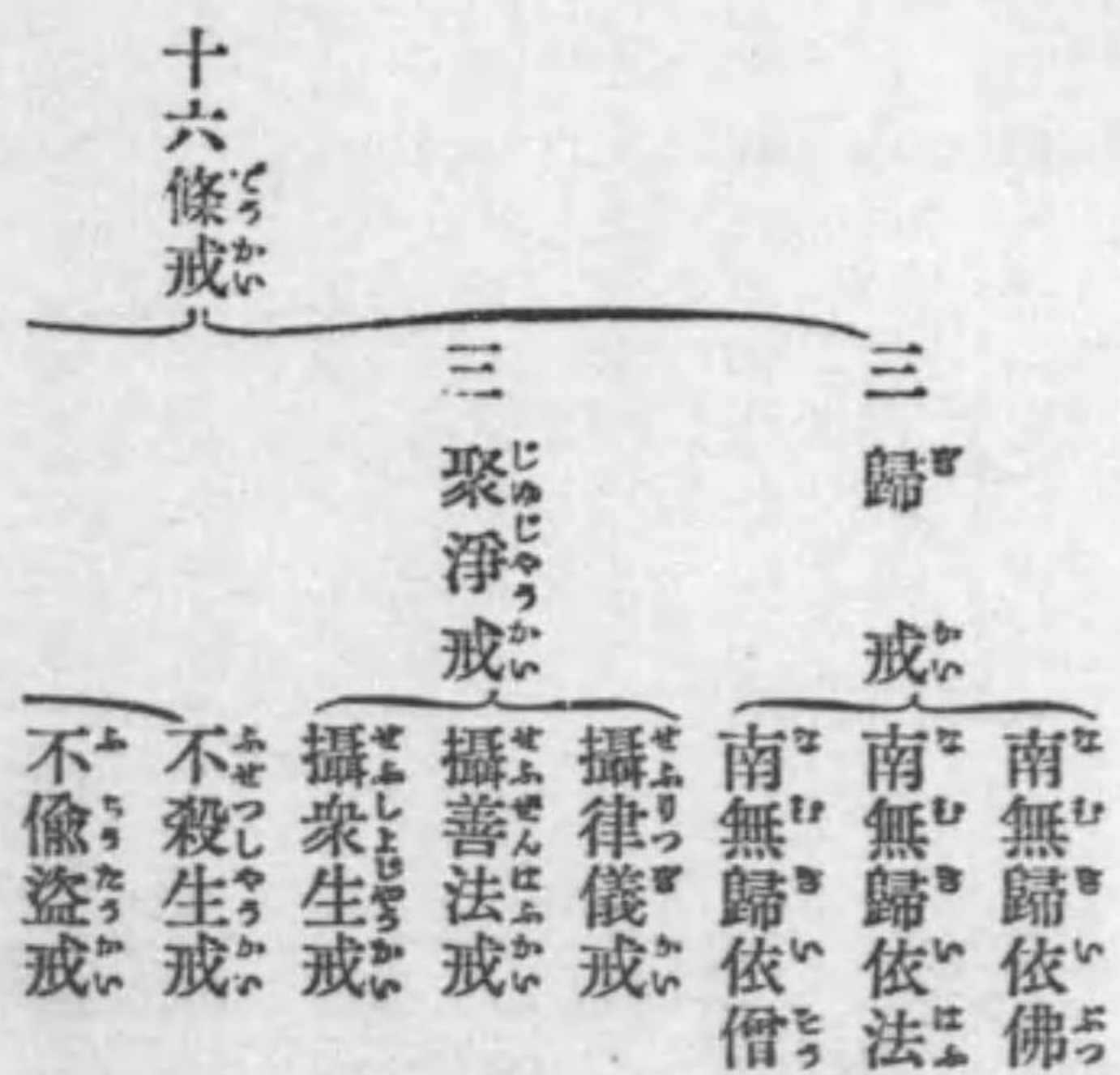
元來此の禪戒は何時頃より傳つたかと云ふと、萬仞和尙の「禪戒鈔」に見るに「西天結經、東地翻譯の前に先つて以降、二十八代次第相承して少林大師に到り、その所得の法を以つて、假りに名けて、正法眼藏涅槃妙心と云ひ、一大事因縁と曰ひ、威音那畔の最大事と云ふ、即ち是れを禪と名け、之れを戒と號す、禪戒の稱由つて設くるなり」とある所より見れば、此の禪戒は、佛が正法眼藏を大迦葉に付囑せられたるにきき御傳へになつたのである。然らば此の禪戒はその傳ふところ甚だ遠く、又單に佛弟子の行業を制定せられたと云ふ狭い意味のものでなくて、既に一大事因縁と云ふのであるから、其名稱は同じくこれ戒であるけれども、禪戒は直に毘盧性界に入つて單に毘盧心印を提げて、其の授受の施設も思儀分別するところではない。

十二 十六條戒

此の十六條戒は成佛の基礎、人道の根底であつて「梵網經」には「衆生佛戒を受く



れば即ち諸佛の位に入る位大覺に同うし己る、眞に是れ諸佛の子なり」とある、故に吾宗にては、受戒入位を以て安心の歸趣と定めてある。吾宗は一面に於ては、坐禪本位であると同時に、又一面に於ては戒法本位である、今十六條戒の名目を上げてその大綱を圖示せば

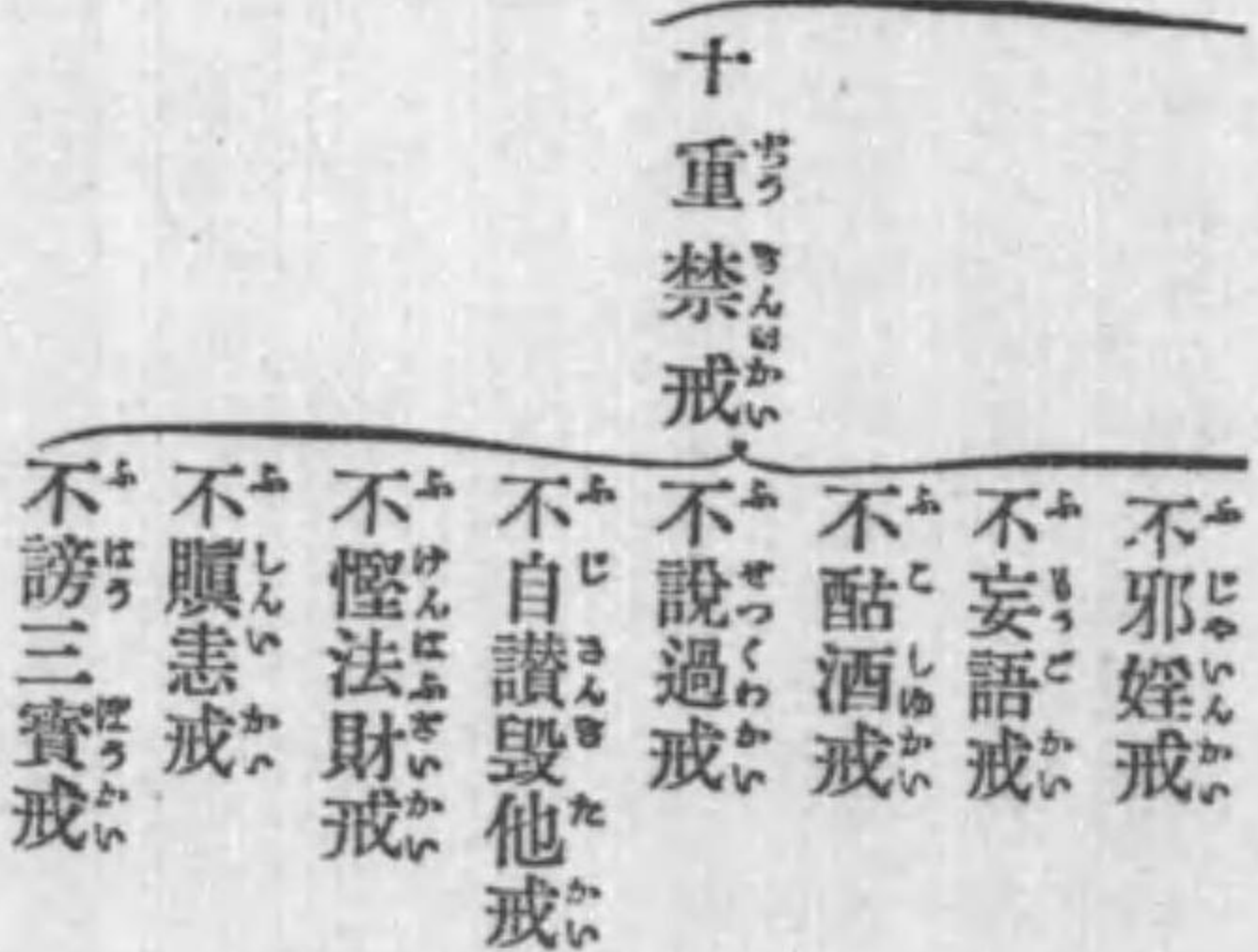


となるのである。

十三 受戒の次第

斯くの如くにして、吾宗にては、戒法を以て成佛を説き、十六條戒を立するのであるが、其の第一を三歸戒と云ふのである。併し乍ら、此の三歸戒を受けるに當つては

三、曹洞宗の安心





先づ懺悔と云ふことが大切である、「我昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋痴、從身口意之所生、一切我今皆懺悔」と眞實、心の奥底より、清淨になつたところで、此の三歸を受けるのである。三歸とは説明するまでもなく、三寶に歸依するのである。佛は吾人の歸所依所である。佛の所説が法である、法を護持するところのものが僧である。此の三は吾人が身心修養の所依となる標準となる無二の寶であるから、之れを三寶と云ふたのである。詳言せば三寶には三種の功德がある。一言にして云ふならば、三寶とは三徳である、宇宙及び人生に於ける徳の三方面である、三寶は結局一體になるのである、吾人は懺悔滅罪の後は先づ此の三寶の妙徳に歸投、依杖して、確固たる信仰を起し、茲に於て、三聚淨戒即ち凡ての惡はせまじ（攝律儀戒）凡べての善は行はん（攝善法戒）その功德を一切衆生に蒙らしめん（攝衆生戒）との戒即ち誓願を立てるのである。前二戒が自利行て後の一戒が化他行である。斯の如くにして自利々他の願を立て、此の三聚の徳を以つて實際境に對し、物に接して行くところに十戒となつ

て現はれるのである。此の十六條戒を身心に受持して、實行して行く上に於て、茲に始めて、諸佛の子となり、涅槃大覺の門が開かれるのである。元來吾宗の安心は此の處を究極とするのであつて、安心の大綱としては



である。これ以後の行なれば發心以後の妙行であつて、此の中の骨子となるところは受戒入位である。

十四 戒法の二義

茲に一言付け添へ度きは、戒法には止惡と作善との二種の意味がある。止惡とは消極的に惡をなしてはならぬと制止する方面であるが、更に作善と積極的に善をなせと



云ふ方面が無ければならぬ。

十五 坐禪と受戒

さて斯くの如く吾が宗門に安心を説くに當つて二方面より見ることが出来る、一は坐禪門で二は受戒門である。然らば此二門が全く別物であつて、各獨立して居つて、其歸結を別にして居るか云ふと、決して左様ではない、又今日一般に在家化導の場合には戒法本位にして、出家安心の場合には坐禪本位にして居る様な傾向も無いとは無いが、これも又必ずしもさうとは定まつて居らぬ。道元禪師は辨道話の中には矢張り在家人と云へども、坐禪すべきことを示されてある。

又「普勸坐禪儀」に於ては「上智下愚を論ぜず、利人鈍者を擇ばず專一に工夫せば即ち辨道なり」と云はれてある。坐禪及び受戒は吾宗に於て出世間、世間の區別なく大に肝要なる綱目と云はねばならぬ。

十六 禪戒一致

さて斯の如く云ふと、坐禪と戒法は全く別であるかの如く考へられる様でもあるが決してさうではない、元來此十六條戒を單に世間の法律の様に考へては大なる誤りである、其本は釋尊所傳の戒法であるけれども、實は人々本具の戒徳であつて、即ち是れ自己の光明である。端坐の正當直に本來の面目現前して、通身に戒源を顯現したところ、自然に大用現前し任運無作にして持戒の行業となるのである。されば十六條と綱目を別にした所で、直にこれを自己の光明の十六輪相と見ることが出来る。斯の如くにして此の禪戒なるものは禪の外に存立するものでない、又一方禪から見ても、禪は戒定慧中の禪にあらずして三學の徳を悉く含んでゐる、又六度中の禪にあらずして六度の功徳を悉く含んで居るものである、吾人が三昧に端坐して、直下第二人なきところ、本來面目現前の時に當つては、一方又これ戒體の露現と見る事が出来る、依つて「禪戒訣註解」には「禪中に戒あり一にして二、戒の外に禪なし、二にして一、性相俱に通じ、事理滯ることなし、水中の鹽味、色裏の膠青、是れ吾が戒を標して禪



の名ある所以なり」と、元來戒法の根本とするところは諸惡莫作にあらず、衆善奉行にあらず、自淨其意にあり、眞個に自淨其意なるところに於て、自ら諸惡莫作なるべく衆善奉行と現はるべし。其自淨其意はこれ佛法の本懷であり、禪の目的であり、又戒の本意である。

斯の如く吾宗要とするところ、禪と戒との二方面を有する様なれども、其の根本は一である、禪はこれを實行する場合には軌轍がないが、自然に戒法に合する、戒法の根本は禪でなければならぬ。されば禪と云ふも戒と云ふも、一物の兩方面のみ二即一即二、禪中に戒あり、戒中に禪あり、禪戒は全く不二なることが知らるゝてあらう。

十七 修證不二

元來、坐禪にしたところで、受戒にしたところで、吾が宗の立場から云ふならば、本證の上の坐禪、本證の上の持戒でなければならぬ。坐禪をした結果成佛すると云ふ

てない、受戒をして後に成佛するのではない、坐禪の當體が成佛である、受戒の當體が入佛位である、修と證と決して二つに見るものではない、本證の妙修なるが故に、證中に修あり、修中に證あり、修證不二の上の安心である。されば修の始め終りもなければ、證の始め終りもない。吾人の平生が坐禪であり、持戒でなければならぬ。

十八 歸結

斯の如くにして平生を等閑にせず、一舉手一投足、行住坐臥が佛法となつて、日々行持が直に佛作佛行になつたときに、始めて吾宗々意安心の決擇せられた人と云うてよろしい、これが眞に、自己の身心及他己の身心を脱落した人と云ふべきであつて高祖大師は、これを身心脱落、脱落身心と云はれてあるのである。

四、禪の修養

近來世人が唱ふる所の修養には幾多の種數があるであらう、が今納は禪の修養に就



いて所思の一端を述べ様と思ふ。總て何事に依らず光陰を惜むと云ふとは尤も必要なことである。修養の第一歩は乃ち光陰を惜むと云ふことである。虚しく光陰を拂り、無駄に月日を送るは國家の罪人、懶怠放逸にして空しく時光を費すは大丈夫の愧づべきことである。故に吾人は其職を勉め勵み、君の爲め、國の爲め、忠實誠意を専らとして働かねばならぬ事は申迄もなく、自彊息まざるの精神がなくてはならぬ。

古聖先賢は日月を惜み、光陰を惜むを自己の眼睛の如くてあつた。東坡の詩に「竹馬春風如昨日、不識何時雪滿頭」とある、青年は老い易く、光陰は人を待たざるの意。白氏文に云く「遅々たる華日も明窓に坐して思ふべし、肅々たる雨夜も白屋に坐して忘るゝと勿れ」と、又西哲は「時は金なり」と云ひ、石頭大師は「光陰空しく渉ること勿れ」と仰しやつた。古人皆光陰の空費を誡めたるを概ね斯の如くてある。

我國六千萬人中、農となく商となく、工となく士となく、老幼男女を問はず、上下心を一にして、君の爲め國の爲め、日月光陰を空費せざれば、倍々國富み兵強うしてされば道元禪師は

イタヅラニ百歳イケランハウラムベキ日月ナリ、カナシムベキ形骸ナリ、タトヒ百歳ノ日月ハ聲色の婢奴ト馳走ストモ、ソノナカ一日ノ行持ヲ行取セバ、一生ノ百歳ヲモ度取スベキナリ、コノ一日ノ身命ハタツトブベキ身命ナリ……又云ク……一生百歳ノウチノ一日ハ、ヒトタビウシナハンフタ、ビウルコトナカラシ、イヅレの善功方便アリテカ、スギニシ一日ヲフタタビカヘシエタル紀事ノ書ニシルサバルトコロナリ、モシイタヅラニスゴサバルニ日月ヲ皮袋ニ包含シテモラサバルナリ」

と、空しく光陰を費ひやさむるを誡められたのである。百丈大智禪師は「一日不作、一日不食」と、時光の空費すべからざる大教訓を以て實行せられた。苟も修養に志す者は身心に銘じて忘れてはならぬ。



禪の修養と云ふ、禪は常濟大師は「直ちに人をして心地を開明し本分に安住する」と示され、高祖承陽大師は「三業に佛印を表し三昧に端坐する時徧法界悉く悟りとなる」と示された。然らば即ち三業に佛印を表し、三昧に端坐するのが直ちに人をして心地を開明し本分に安住するのである。三業に佛印を表し三昧に端坐する時は十方法界が皆大悟の面目である。夫れ三業とは身と口と意との三つにして、今佛印を表する時は全身清淨にして起居動靜に契ひ、法に合するのである。口業も亦清淨にして一言一句規に契ひ、矩に合して說法度生となるのである。意業の上に於ても亦清淨にして貪瞋癡の三毒を脱し、違順の境に對して貪欲に墮せず、瞋慧を起さず、三業入三昧の時は上は諸佛菩薩をして、本地の法樂を増し、下は三途六道の群類をして、大解脱を得せしむるの大功德を具せざるはないのである。

世人や、もすれば、禪と云ふとを禪的であると云ふと云ふて、禪を何か變つたことか何かのやうに妙な風に用ひて居るが、禪は決して左様なものではない。

禪とは佛法と云ふ語の換へ言葉に過ぎないのである。即ち佛法を活かして用ひて行くところに禪は活用するのである。故に日々の吾々の行持を離れて別に禪はあるものではない。されば佛法を遠い所や高い所にのみ求めて居ては禪を諦得するとは不可能である。禪は恰も日々赫々と輝き渡つて居る太陽の様に、細には無間を照らし、大には世界全體を照らして居る。承陽大師は「佛道は人々の脚跟下なり」と示され、又古人は「脚下黄金土」とも云ふて居る通り、禪は宇宙一杯になつて居るのである。禪眼を以て見る時は宇宙は禪の露現である。元來此の世界中のものは一として禪ならざるものはない。吾人御互に皆佛法中にあつて、寝たり起たりして居るので、片時たりとも此佛法を離れ、禪と遠ざかる事は出来ない。吾人御互は佛法海中に游泳して居り乍ら佛法を知らず、魚が水中にあつて水を知らずに居るが如く、遠くに佛法を求めて、迷ひに迷ふて居るのは凡夫の常である。

此處に一つ氣が付いて來れば、松吹く風も微妙の御聲となり、柳を染むる色も微妙



の御姿となつて、皆佛法の現はれてないものはなくなつて了ふのである。されば承陽大師の御歌にも「谷の色、峯の響もみなながら吾が釋迦牟尼の聲と姿と」と云ふのはこの道理を示されたもので、彼の蘇東坡が常聰禪師に參禪の夜に無情説法の話聞き、翌朝廬山にてフト山川谿谷の俗ならぬ風韻に接して「溪聲悉是廣長舌、山色豈非清淨身、夜來八萬四千偈、他日如何舉示人」と大悟せられたのは此處の道理に徹底した心のドン底の眞の叫聲であつたのだ。實に此道理を見徹するに於ては桃花を見ては悟道の因縁となり、躡く石にも、竹を撃つ礫にも皆佛法の道理を保任することが出来る、其時初めて活きた佛法を吾物にするのが出来るのである。

サテ斯様に佛法は吾人の到る所であり、宇宙一杯になつて居るならば、修行などはしなくともよい、人々直に佛法の大海中にあるてはないか、修行はいらぬなど、早合點してはならぬ。古來參禪者の中には斯様な誤見に陥つた人が澤山あつたやうに思ふ、或は今日もあるかも知れぬ。是を解毒圓呑の人と稱して非常に排斥するのである

吾人は日常此の佛法の中に活計して居るのであるけれども、それを知らないで居る、知らないで居るから他に佛法を求めたり、佛法に背いた様な行ひをして居る、即ち佛法の大海中に居り乍ら佛法と別になつて居る、空と鳥とは同皮肉、魚と水とは同皮肉で、これらは空に在ることを知らずして空と一つになつて、自由に翔廻つて居る、水中に在る事を知らずに水と一枚になり恁々と泳いで居る、然るに吾人お互は佛法の大海中に在つて種々の妄分別を、盗にし、元來隔歴なき佛法大海中に在つて隔歴を作つて居る、恰度吾人と佛法との間には玻璃一重へだてゝ居る、窓外の牡丹の花は玻璃が在つても無くても同じ色に見ゆるが、いざ實際にこれを吾物にするには是非共此の玻璃を打破しなければならぬ、元來此の隔りさへ取り除けば、そこに佛法を我物にする道理がある、佛法を我物にすると云ふても、向ふものをこちらへ引き寄せるものではなくて、自己が持つて居る我見我執を打破した當所に佛法保任の道理がある。その我見我執を除く、ソコに始めて修行と云ふのが大切である、禪の修養の必要なるは即ち



それである。

吾人は日常佛法の中にあるのだから修行をしなければならぬ。吾人の身體は本來清浄であるけれども、修行をせねば清浄にはならぬ、恰も世界に周遍せる風性も扇を使はねば風は生ぜぬ如く、禪は宇宙に充滿して居るけれども、修養をしなければ我物とはならぬ。一定の時處を限りてあるものならば、従つて修養も制限せらるゝのであるが、宇宙に編滿して居ればこそ、何時でも何處でも學べば録其中にあり、行ずれば證其の中にありて、修行するところに證果が現はるゝのである。此道理が尤も大切なのであつて、さもないと佛法の中に在つて常に迷ひ常に苦しむとなるのである。例へば醉人が醉中に、友人ありて袂の中に入れて呉れた結構な玉を知らずに居るが如く、世の中には佛法と云ふ玉を持ち乍ら、我見我執の酒に酔ふて居て、知らずして只管顛倒妄想して、佛法と別になつて居る人が澤山ある、佛法と自己と別々になつて居るが、凡夫で、佛法と自己と一枚になつた人が佛である、佛と凡夫との差別は唯だ此一

點にある。

趙州和尚が「他は十二時に使得せられ、吾は十二時を使得す」と云はれたのも此道理に外ならぬのである。故に承陽大師は「此の法は人々分上ゆたかに具はれりと雖も修せざるには現はれず、證せざるには得ることなし」と示されたのである。畢竟修養の必要を説かれたに過ぎぬ。然るを解毒圓吞主義に何ても彼でも丸呑にして、禪は宇宙に編滿して居るから修行などしなくてもなど、思ふのは大なる間違と謂はねばならぬのである。

### 五、修養の心得

「發心正しからざれば萬行空しく施す」と、湛然妙樂大師の教誡せられし如く、苟も人間は世に處し事を成さんとするには、初めの一念が正しくないと、其事が立派に成功するものではない。古聖我を欺かず、試みに先徳の事蹟に鑑みよ、釋尊の大法が三



千年後の今日尙ほ光輝六合に充滿して一切衆生を救済する所以のものは、即ち釋尊發心の動機が如何にも正しいからである。道元禪師が齡僅かに八歳にして逝き母の枕頭に侍り、縷々として立上る香烟の昇りては消え、消えては昇る、無常變遷の有様を泌々感得するに及び、遂に出家得度せられし如き、古來其例鮮少ならず、凡そ何人か何事を成さんとするにも其初一念が尤も肝要である。

正しい心を發すと同時に、亦之を相續することに勉めねばならぬ、人間は誰れ彼れの差別なく、一時的の發心は如何にも立派であるが、其相續や大難であつて、而も眞心を相續するに非ずんば、一代の成功者たることは絶對に不可能の事である。

古へより「油斷大敵」と云ふ言葉がある、平素何事に依らず油斷をしてはならぬ。古來の偉人傑士と稱せらるゝ人々の行履を見るに何時如何なる場合にも決して油斷はなかつたのである。

英國の某商館に於て、館内の整理委員を選定するの必用が起つた、多くの館員は日

常の手腕を發揮する好時期と思ひ、各々其選に預らんことを希望して居つたのである。一日主人は其中の一人を自己の室内へ呼び入れた、呼ばれて入り來るを見るや、眞向より「貴様の如き者は決して其器に非ず」と、大喝一聲を浴せかけたのである。すると件の男は憤然として席を蹴つて出てしもふた、次に又一人を呼び寄せ前と同じく大喝一番、靜かに其男の舉動を注視するにこは、如何に少しも怒氣を帯びず、丁寧に頭を下げて恁々と扉を閉ぢて出て行く後姿を眺めたる主人は、實に此人ならではと、直ちに呼び入れ整理委員を囑托するに、果して見事に成功したと云ふ事である。此人の心頭は平素如何なる場合にも萬事に油斷はせなかつたのである。

「獅子欺かざるの力」と云ふ、獅子は猛獸を取るにも、如何なる小獸を追ふ時にも必ず全力を費し、未だ曾つて油斷をしない、蓋し修養の一方方法として忘れてはならぬことである。

次に偏狹の根性を起してはならぬ。仰いて以て畏るべき神佛の存在を認めず、因果



の理法を撥無するが如きは邪見迷妄の徒と云はねばならぬ。世は斯る人々にて充たされなば暗黒世界になつて了ふのである。必ずや正見でなくてはならぬ。正見とは因果の理を信じ、神佛を敬ひ、父母師長に對して禮を守る、この心が即ち君に對する忠、親に對する孝となるのである。

されば萬事に於て偏見てはならぬ、甘いものを好むと云ふても朝夕菓子のみを常食とする事は出来ぬ、時には辛いもの、苦いものも必用である、亦世には酒を好むものもあれば牡丹餅を好むものもあると一般、同じ佛教でも眞諦門あり、俗諦門あり、各宗各派の祖師方が、各々人の機根に應じて宗旨を立せられたるは實に尤ものこと、謂はねばならぬ。

昔も今も變りなきことであるが、苟も修養に心掛る者は意志を強固にすることが尤も必要である、意志が充分に鍛鍊してない者は事に方りて挫けて了ふ。明治維新の大革命に於ける勝安房公や並に山岡鐵舟居士の如き、少壯時代より意志の鍛鍊に修養を

積まれたのである。さればこそ王政復古の大事件をも圓滿に解決することが出来た。

況んや今日の如く世界の舞臺に立つて、内憂外患の諸問題は眼前に横つて居る國家の多事に際し、其當局者は勿論、國民一般が充分意志を強固にするの急務なるは云ふ迄もなく特に外交官の如き、其意志薄弱なるに於ては、對者をして己が意見に従はせしむることの不可能たるのみならず、却つて對者より吞吐せられ、終には其結果莫大の損を招くが如きことは無いとも限らぬのである。故に少壯時代より心の落付、意志の鍛鍊が尤も必用なことである。

又言葉を謹まねばならぬ。吾人は社會の一員である、社交上に於て各自充分氣を付けて居ぬと「口は禍の門」になることは決して鮮くない。口と云ふものは使ひやうによつては「幸の門」ともなる、人の爲になることを話し、家の爲になることを語り國家の爲になることを述べる、皆是れ口の作用であつて言葉は實に大切なものである。



けれども人は兎角虚偽を云ひたがるもの、平素知己の者と談話をして居つても不識の間にも人の悪口を云ふたり、人の爲にならぬ事を平氣で云ふ様なことの、よくあるものであるから、充分謹まねばならぬ事である。

生存競争の結果でもあらうが、今日は職業の問題が餘程八釜敷なつて來た。其結果正業を求めずして、徒らに利益の多い方面にのみ奔らんとする傾向のあるのは、國家の爲めに甚だ慨嘆に堪へぬ次第である。

正業でさへあれば、官吏もよい、軍人もよい、教育家もよい、將又、百姓もよい、商人もよい、車夫馬丁と雖も仰天俯地聊かも恥るところがないではないか。

然るに現代の人々は多く易きを求めて難きを避けんとするの結果、或は詐欺、殺盜、拘兒と云ふが如き、聞くだも忌はしき事を常職として居る者さへあると云ふに至つては、實に言語道斷の沙汰と言はねばならぬ。人は境遇により、思想の變遷を免れぬ如く職業の正邪に依つて其心掛けは異つて來る。

今日では堂々たる人々が自働車の烟を立て乍ら、種々なる不正の事を行つて居ると云ふが如き、日々の新聞に傳へらるゝ事であるが、斯かる人々はよしや一時の榮華を極めて居つても、決して永遠にそれが續いて、安心の出來得べき筈はない。

故に何でも正しい職業を選び、正しい世渡りをするに云ふことが、先づ第一に修養の眼目とせねばならぬ、然らずんば、百千卷の書を讀破しても畢竟何の所詮がないこととなるのである。

人生五十年の歲月は短い様でも随分永い。其間社會の生存競争場裡に立つて、或は成功者と唄はれ、或は落伍者と嘲られる、一方に榮華の夢を貪つて居る者もあれば一方には其日の糊口にすら差支へると云ふ者もある。世の中は實に千態萬狀であるから翻つて思ふに、正しき業務に従事して、正しき道により利益を得たものでなくては、よしや巨萬の財を積んで堂々たる邸宅を構へても、其心情や惘然の至りと謂はねばならぬ。之に反して其生活が豊がでなくとも、人生の正しき道に依つて衣食して居



る者は、實に立派な人と謂はねばならぬ。近來の弊風として兎角自己の安全を計らんが爲めに、單に目前の利益にのみ眩惑され、人目をゴマかして迄も私財を蓄へんとするが如きは、自ら死地に陥るの愚を敢てするものであつて互ひに深く注意を要することである。

日々の生活は吾人の生涯を建設する生きた事實である。子々孫々に及ぶ活教訓である、社會全般に行き渡る表現である世界萬國に波及する、重大なる責務のあることを思はねばならぬのである。

謂ふ迄でもなく、今日の時代は封建の昔とは異うのであつて、國民一同は充分勉勵せねばならぬ時代である。封建の昔には世界を知らぬて濟んだ、否日本國內と雖も知らずに濟んだ者が多くあつた。其時代には夫てもよかつたのであるが明治維新の王政復古に依つて積年の制度は打破せられ、萬國交際に依つて世界の文明を知り、更に日清の役を経て東洋の日本國を以て見做さるゝに至り、其後星霜僅かに十ヶ年、一度露

國と戦端を交へ、其終局を告ぐると同時に、世界の強國として一躍一等國の班に列せらるゝに至つたのである。

更に日英同盟に依り、世界に於ける我國の地位は愈々高めらるゝに至つたのであるが、悲むべし其内容に於ては甚だ貧弱國であつて、世界列強國の富の程度とは殆んど比較にならない。今日は老若男女の差別なく、共に此事を心頭に於て大ひに奮勵努力せねばならぬ時代である。

乍併、富の程度に於て諸外國に劣り、貧弱國であつても、此際國民一同が確固不拔の精神を以て、輕兆浮薄の思想を卻け、眞面目に働いて行くと云ふ、所謂根柢ある實生活を實現するの覺悟があるならば、柄は國家の前途は決して悲觀するに及ばぬと思ふ。見よ今日世界の強國と稱せらるゝ獨逸の如き今日の優勢を示めすに至りしは實に五六十年以來の事ではないか。

往昔、禪門の偉傑百丈禪師は衆に向つて「一日作さざれば一日食はず」と仰せられ



た。此語は有名なものであつて誰でも知つて居るが、而もこは禪師九十歳頃の御言葉である。同時に禪師は此通り身に體して實行せられた人である。

亦彼の脇尊者の如きも八十歳にして出家得度、終日終夜經論を研究し坐禪入定せられ、一夜も脇席に着かせられず、終に三明六通八解脱を得て、傳道の祖師となられたのである。古今斯の如き例は決して鮮少ではない。志があつて努力する時に於て誰彼の差別なく必ず其目的は達せらるゝものである。況んや前途遠遠なる青年諸氏に於てをや、特に今の時代に鑑み一日も修養を怠つてはならぬのである。

大正時代は守成の時ではない。大ひに發展を試みねばならぬ時代である。既に世界列強國の班に列なり、而も貧弱國として國際場裡に活躍せんとする我國の狀態を思ふならば、宜しく國民各自の修養が、やがて國運の將來に偉大なる影響のある事を考へねばならぬのである。明治年間の光輝を永遠に傳へ、今後の發展を計るには是非共國民一同が正しい道を踏み正しき行ひをして、同じ一個の輸出品でも充分信用の置ける

様誠心誠意を以て品物を造ると云ふ考へを持つことが第一である。

然らずんば、各國の同情を失うて了ふ、同情を失ふと共に我國の經濟界に及ぼす影響は亦甚だ大なりと謂はねばならぬ。其結果日本の將來は自滅するより外にない。されば此際一己人としても亦國家の上より云ふても勉勵努力の緊急なる事は火を見るよりも明らかなる事であらうと思ふ。

### 六、禪の功用

今日世界から見れば、佛法と世法とが別になつて居る、又僧侶の内でも世法と佛法とを全然別物に見て居る人があるであらうが、佛法の達人の眼から見れば、世法と佛法とは別物でない、みな佛法の現はれと見える、だから文珠大士は「我れ今、法の佛法にあらざるものあるとを見ず」と云はれて居る。文珠大士の眼より見る時は法として皆佛法にあらざるはないと見えるのである。



本来、佛法眼を開いて見るときには、佛法の中には世法はないので、みな佛法である。然るに世法の差別眼で見ると世法の外に佛法があるやうに見えるのである。元來世法の外には佛法はないけれども、佛法の中より見れば世法佛法の二物を見ないと云ふと、之を今日の論理上から見るとどう云ふ論法になるか納は知らぬが、要するに世法と佛法とは二法あるのではないのだ。

佛法は何か高遠にして、世法とは没交渉の如く思ふは大なる誤りである。高祖大師は「正法眼藏」の中に「いはんや世務は佛法をさゆとおもえるものは、たゞ世中に佛法なしとのみ知りて、佛中に世法なきことをいまだ知らざるなり」と仰せられた。此の言葉が影略互顯してあるから一寸解り難いが、世法の中には佛法はない、佛法は世法の外にあるものと世間の人は思つて居るが、佛法の中には世法はない。即ち佛法には世法佛法の別を見ない、みな一佛法であることを知らぬ、即ち世法即佛法、佛法即世法であると云ふことを知らぬと云ふ意味であります、世の多くの人々が私は商賣が忙

がしいので逆も佛法などを修行することは出来ない、坐禪などをする餘裕がないなど云ふものがある。それを誠しめられたのである。決して佛法は世法と別なものではない、佛法は今日の活社會に現はれて居る、佛法は御寺の本堂や經文の中に許りあるのではない、これ等の間にもあるが、それよりも、この佛法を吾人日常の上に活して行くところに、佛法の尊いところがあるのである、商人の持つ算盤の上にも佛法はある、そこに佛法があれば決して不正の計算は出て来ない、吾人が日常自己の職務をなす上に於て、一點自己心地の靈性を味さず、君となつては君の道、臣となつては臣の道、父となつては父の道、子となつては子の道、人類としては人類の道、國民となつては國民の道、乃至士、農、工、商その道と一つになつて、仰いて天に慚ぢず、伏して地に愧ぢず、進んで社會に恥ぢず、退いて自己に一點仄しかざるときには、これが實に佛法の上の生活となる。

法律が怎うの、倫理が怎うのと騒いだところで、人間同士の約束の上になり立つた



規則は根本的の道とは云へぬ、眞實人間の踏むべき道は、自己の靈性より發した固い信仰の上の行ひでなければいかぬ。之れを佛法と云ふのである。佛行と云ふのである。かゝる人の行ひに、表裏がない、利害によつて動かない、「晴れてよし曇りてもよし富士の山、元の姿は變らざりけり」て、八風吹けども動ぜず天邊の月である。賄賂を出せども、道ならざれば取らずだ、だからその人の行は表裏がないのみならず、間斷がない、此所に到つて恐るゝところなく、憂るところなく、各その職にあつて、正々堂々と進んで行ける、之を古人は「平常心是道」と云はれて居る。

平常心とは平等常住の心なり、常に佛法の上にあつて變らざるこゝろなり、こゝに到つて何をか佛法と云ひ、何をか世法と云ふ。世法と佛法との別はないのである。この心得の上立つての佛法でなくては眞の佛法ではない、佛法は禪の換言葉に過ぎぬ。禪の實際の尊いところは、世間にこれを活かして行くところにあるのである。而して、禪の尊ぶところは、回光返照と云ふことにある、回光返照とは、自己の心

地の光を自己に返して照すと云ふことである。人間は自己の光明と他に向つて、アゝとか、コゝとか照することはするが、自己の光を自己に反照することが却々出来ない、自己の光明で自己に照すなければ駄目である。佛法を習ふと云ふことは、最初に自己を習ふと云ふところにある。丁度太陽は東から出て晩になると西に沈む、沈み乍ら却つて東をてらす、回光返照もさうである。自己の光明を以て自己を照し、自己の日常如何、行履如何、國民として國民の道に缺けては居らぬか、自己は子として責任を盡くして居るか、乃至各その職に向つて忠實であるか、本心を味ましては居らぬか、佛法に遠かつてはをらぬか、如何如何と回光返照して行くのである。禪にて言ふ「脚下照顧」とはこのことである。禪とて僧堂の中許りの話ではない、佛法とて御寺ばかりに關係したことはない、世間の上で吾人が日常の上に禪はある。こゝを「行も亦禪坐も亦禪」と云ふのである、斯うして見るならば、佛法だ世法だなどゝ云ふ區別が何處にあるか、佛法世法と云ふ名も立たなくなる。禪の功用はこゝにあることを



知らねばならぬ。

何れの宗教に致した所で其の目的は皆一つである。即ち自己の精神を決着して大安樂の境涯に到ると云ふのがその目的である。佛教の言葉を以て云ふならば即ち安心を得るのである。即ち安心立命とも云ふのである。ところがこの安心を得ると云ふことは、却々容易なことではない、何故かと云ふに、吾人の此の心と云ふものは、身體の無常であると同時に矢張り常住でない、變り通してある「念々無常代謝新なり」で、一時片時も寂靜と落付いては居らぬ、春になれば春色に引かれて心動き、秋になれば秋聲に羈されて愁心を起す、寝められたと云うて喜び、賤なされたと云うて怒る、失意の時になると沈んで意氣が衰へ、得意だと云ふと浮調子になつて誇る。全然走馬燈の回るやうに、朝から夕まで、前念後念、生滅變化して暫くも止まつては居らぬ、丸て貪瞋痴の三毒に使ひ廻されて居る、三毒のために御奉公して居る。古人が「心の主となれ、心を主とするなかれ」とはこれを誡めたのである。この心の主となるのは、

即ち佛法を吾物にした人でなければ出来ぬ、眞實安心立命の人であつて見れば、決してこの心のために使ひ廻されることはない、これが大寂靜を得た人である。「色界に入つて色に感せられず、聲界に入つて聲に感せられず、乃至法界に入つて法に感せられない」人である。孟子の言葉を以て云ふならば「富貴も淫する能はず、威武も屈する能はず」と大丈夫である。本來ならば一度此所まで修行の出来た人でなければ眞の活動は出来るものでない、活動と云ふことは文字の示す如く、活きた行動である。活きた行動とは、この行動が自己の利益ともなり、他人の利益にも、延いては後世の模範ともなる行ひでなければならぬ。只動きさへすればそれが活動と云ふものではないその行ひが何等益するところのないものであるならば、それは活動ではなくて死動である。若しその行ひの結果が人に害を興へるやうなことであつて見れば、却つてそれは妄動である、今日の世の中に於ては、活動活動と云ふことを頻りに云うて居るが、眞の活動家と云ふものは幾許も見られぬ、死動や妄動は却々に多いやうである。それ



は何故であるかと云うと、今日の人の云ふ活動には土臺が更がない、只上つ面の動くことのみを知つて、其活動の依りて起つた源を考へないからである。眞の活動は此の大安心を得たる、寂靜の根柢より起るものでなければならぬ。即ち大なる活動は大なる寂靜より出るものである。レールのない汽車は有益の運動をつゞけることは出来ぬ、心棒の弱き車は大なる作用をなすに耐えぬ。

一體此の動くことと云ふことは不動即ち靜を別にしては、その作用は現はれぬ、動と靜とは元來別々のものではない、靜中に動あり、動中に靜あつて、萬事萬端工合よく活動が現はれ來るのである。此の理法は天地の法則である。管に人事界のこと計りてはない、見よ、此の世界は全體動いて居ると云ふことであるが、その動いて居るのにも一定不動の理法の上に動いて居るから、春夏秋冬四時循環して變化し通してあるが、其の中に「春は花、夏はほととぎす、秋は月、冬雪さえて涼しかりけり」と、毎年變らぬてはないか、こゝに於て、萬物育し百生長じ天地の活動となつて現はれるのである。

る。

又人事界に見てもさうであり、一國に於ても然り、家庭に於ても亦然り、動と靜とは離るべきではない、この動靜の二つが離せず、即せず、靜中動、動中靜となつて行くところに活動の意義あり、秩序あり、風趣があるのである。禪語にて此の様子を「東山水上行」とも「橋流れて水流れず」とも云うて居る、御經文の中には「寂靜を起たず、諸の威儀を現す」ともある。實に面白い言葉である。「青山に知らずして白雪終日寄す」このところに人生の面白味があるのである。吾人が日常世の中に處するものも、これと異つたところはない、その根柢の大丈夫に出來てさへ居れば、雨降らば降れ、風吹かば吹け、雨に侵されも風に吹き倒されもしない、如何に動いて居つて、これが不動着の土臺の上の働きてあるからであるところが、それがその地盤が、シツカリして居らぬ故、名譽と云ふ風が吹くとその風に吹き倒され、利欲と云ふ雨が降ればそれにしほれて了ふ。乃至色聲香味觸の外境のために動かされ通しになつて、朝から



晩まで自分の心に自分で甘んじて奴隷扱ひにされて居る。

苟くも生れて人間となつて、世の中に立つて行かうとするものが、そんなことではならぬ、故に禪にては「隨處に主となれ」と教へる、即ち「斷へず心の主となれ」と云ふことである。

上來管々しく説明して來たが、禪の功用とは即ちこゝにあるのである。これを要するに禪は死物ではない、禪僧の占有物ではない、吾人は御互に、此の實社會に於ける修養の根柢であると云ふことを知つて貰ひたいのである。

### 七、何をか生死と云ふ

昔し漸源仲興禪師、道吾山宗智禪師の會下において、侍者となり、又は典座となりたる事がある。或る一日宗智禪師に隨つて檀越の家に行きて喪を弔う、師、棺を撫して云く「生か死か」、古人は斯の如く、左之右之の上に於て油斷をせない誠に修行に親

切である。今日の人も随分檀家へ葬式に參るが生か死かの問答はない。只讀經して歸る計りである、生是れ何物ぞ、死是れ何物ぞと參究せねばならぬ。

宗智禪師曰く「生とも道はず死とも道はず」是禪師の親切なる詞と云はねばならぬ元來不生不滅なる故に、生とも道はず死とも道はず、實に、本來の面目の丸出しと云ふてもよからう、師曰く「何としてか道はざる」宗智禪師の親言親句が未だ耳根に徹せざると見へる、是れ蹉過して居ると申さねばならぬ。宗智禪師曰く「道はず道はず」實に此の道はず道はずの言語は老婆心より出するなり、弔ひ畢はりて歸る途中師曰く「和尚須らく仲興の爲めに道ふべし、若し道はざれば即ち和尚を打ち去らん」古人は實に修行に親切である、どこまでも徹せずんば止まざるの決心、法の爲めには喪身失命をも顧りみず、宗智禪師曰く「打つ事は打つに任す、生とも道はず死とも道はず」師遂に禪師を打つこと數拳。

宗智禪師、院に歸りて師をして暫時會下を去らしむ「若し知事の役寮ともに知れた



ら主人を打つ故に汝も亦役寮の爲めに打たれん」實に親言は親口より出づとは此の事である。師即ち禮拜して辭し去る。後に、石霜和尚の處へ行きて前の話をなした、宗智禪師を打ちたる事も話した「今日請ふ和尚爲めに道へ」其時石霜曰く、「汝聞かずや宗智禪師の道ふことを、生とも道はず死とも道はず」と、此の聲の響き未だ止まざる處に於て大悟した。即ち宗智禪師遷化の後ゆへ淨齋を設けて當時打ちたる罪を懺悔したとある。

古人は生死と聞きならば桶底の脱するまでは研鑽したものである、全體生死とは如何なるものである、生死と涅槃とは是れ同か是れ別か、妄想と實相とは是れ同か是れ別か、業識と佛性と、是れ同か是れ別か、衆生と佛とは是れ同か是れ別か、煩惱と菩提とは是れ同か是れ別か、水と氷とは是れ同か是れ別か、水と波とは是れ同か是れ別か、生死を涅槃として居る人あり、涅槃を生死として居る人もあり、華嚴經には生死は菩薩の園林とある。道元禪師は生死は佛道の行履なり、生死は佛家の調度なり、

生死は佛の御命なりと示してある、生死は佛なりと道ふてもよい、生死は實相と道ふてもよい。

古人は「生死去來眞實人體」とも道はれた、了生達死の大道に通達して見れば生死の中にありて生死は透達して居る、古人も「生死到來の時如何」と問ふたら「吾れに生死なし」と云ふた、信心銘の中には「眞を求むる事を用ひず、唯須らく見を息むべし、二見を息むべし」二見とは、煩惱と菩提、妄想と實相、佛と衆生、生死を厭ひ涅槃を求むる、此二見の執見を打破するにあるのである、執見を脱すれば、生死は即ち涅槃である、修行は只頭を翻して尾となすまでの事である、凡情を除け、別に聖解はない、執着執見を脱すれば「今迄ハイキラル、ホド生キニケリ、死ナレルナリニ死ナフナリ」と、一休和尚も歌はれた、生るだけ生きてしまへば死ぬより外に分別御座なく候である、平常心是れ道の上に生死ありや、生死輪廻は菩薩の園林なることを知らねばならぬ。



此頃或る人が一圓相の圖を以て來て此れに贊をしてくれとの事故、題して曰く

誰知天地主、無姓又無名、

一任吾人喚、從來脫死生、

と、生死の眞唯中に脱生死の處がある、寒暑の眞唯中に無寒暑の處がある、茶を飲む處に脱生死の處がある、飯を喫する處に無寒暑の處がある、佛道は人々の脚眼下にある、自己常に道中にありて迷惑せずと合點せよ、道中には生死はないものである。

### 八、安心の根源

安心立命の要旨とする所は、つまり「諸惡莫作、衆善奉行」で、思想界が如何に混亂をしても、世間一般が不景氣の影響で、如何に不安が伴なつても決して悪い考を懷き、間違つた行をしては不可ない。安心決定の一大事に至つては、説明や理論では眞の面目は發揮されぬのである。故に佛敎何れの宗旨の書籍を見ても、理論を説く

上に於て一應は説明して居るが、その後には必ず實行と云ふ事が丁寧ていねいに説かれてある。元來この佛敎に限らず、宗教全體の上よりしても、亦世間の學問の上よりしても、その極致に至つては文字や言説を以ては到底説き盡されぬ所がある。況して安心立命の本旨に於てをや。然りと雖ども強ひて言へば、諸々の惡は行はない、努めて善行をすると云ふ所に人生の安心がある。

今説明の順序としてこれを部門的にして述べるならば、第一を坐禪門とし、第二を受戒門とするのである。何故ならばと云ふに、受戒は人道の根基にして、坐禪は修證の趨歸であるからである。

禪は梵語の意譯、禪那の略稱であつて之を意譯すると靜慮じやうりよとなる、靜慮と云ふは吾々の朝から晩迄、念起念滅するところの此の妄念妄情を靜止するの意から出て居るので、或はこれを定と譯して居る人もあるのである。

一口に禪と云へば、如何にも高尚深遠なるかの如く聞へるが、禪は決して遠くに求



めてはならぬ。佛道は人々の脚跟下にもある又廣く言へば禪は宇宙一杯になつて居る。換言すれば宇宙は悉く禪の露現である、故に承陽大師の普勸坐禪儀の中に「道本圓通」と云ひ、或は「宗乘自在」と御示しになつて居る如く、元來全世界の事々物物一として禪ならざるはない。恰も風性の常住なるが如く、全宇宙に周偏せりと雖も扇子と云ふ道具がなければ風は生ぜざるが如く、道本圓通であると云ふても修行がなくては現れない、この意味を「この法は人々分上ゆたかに具はれりと雖も修せざるには顯れず、證せざるには得ることなし」と、承陽大師は仰しやつて居る。

されば、坐禪は吾人修行の第一義であつて、又安心立命の根源である。乍併、眞禪現成の時には立居振舞が皆禪となる。永嘉大師が「行も亦禪、坐も亦禪、語默動靜體安禪」と云はれてある如く、行住坐臥が直ちに禪の境界であるけれども、それは眞禪現成の上の話であつて、初心修行の人は專一に坐禪するがよい、坐の時には坐になり切るがよい、そこに安心の處がある。

第二には戒法である。梵網經に「戒を平地となし、定を屋宅となして、能く智慧の光を生ず」とある如く、佛法は戒を先となす、禪苑清規に「參禪問題は戒律を先となす、若し過を離れ非を防ぐに非ずんば何を以てか成佛作祖せん」と、述べられてある、畢竟戒は家屋を立つ處の土臺であつて、安心決定には缺くべからざることを知らねばならぬ。

戒は梵語に尸羅と云ひ、漢譯すれば清淨の義、又調伏とも云ふて、身口意の三業を調伏して惡を作さしめざるが故に斯くの如く云ふのである。又これを律とも云ふ、律は法であつて、出世間の禁制を意味するのである。即ち比丘の二百五十戒と謂ひ比丘尼の五百戒、乃至三千の威儀八萬の細行と云ふ。

以上は事相の上の戒行であるが、戒本來の理體の上から云ふと、戒法は釋尊の獨創ではない、戒の根源は天地と共にあつて無始無終のものである。例へば天に在つては日月星辰、地に在つては森羅萬象、此間に一定の條理整然として、更に一點の昧ます



ところ無く一絲の亂るゝ所がない。古の古を盡し、後の後を盡して居るところが戒の面目である。されば戒法は世間の法制となると同時に出世間安心解脱の道理となるのである。戒は人々本具にして又天地と共に具足したるものなれども、式作法に依りて先受戒の人に付て受けねばならぬ、佛々の相授あり、祖々の相傳ありとある、授者受者共に信じて傳受する處に戒體自ら具足するものである。

さて以上は定心の要旨を説くに當り、一は坐禪門と云ひ、一は受戒門と云ふ二方面よりしたのであるが、然らば坐禪門受戒門何れに依つてもよいのであるか、又この二門が全然別物であるか、而して其歸所を別にして居るか怎うかと云ふに、元來此の受戒と坐禪とは佛法の立脚地から云ふならば、決して別々に見るべきものではない、禪と戒は水と氷との如く、二にして不二である。坐禪は小自己を忘れるのである。小自己を離れると同時に全自己となる、謂ゆる自他の對境を遠離して、萬法と自己と一如に行かねばならぬ。道元禪師云く「三業に佛印を表し三昧に端坐する時、偏法界皆悟

りとなる、上は諸佛をして法樂を増し、下は三途六道の群類をして大解脱を得る」と示めされた。是れ安心の歸處である。なんでも禪と戒とは一如でなければならぬ、坐禪の容は戒の顯はれたのである。

故に禪戒訣註解には「禪中に戒あり一にして二戒の外に禪無し二にして一、性相共に通じ事理滯ることなし、水中の鹽味、色裡の膠青、これ吾が戒を標して禪の名ある所以なり」とあるのを見ても、禪戒元これ不二なることを知り得る所以である。梵網經には衆生佛戒を受ければ諸佛の位に入る位大覺に同ふすとある、戒には古今はない、佛の戒に安住すれば今日の人が即ち佛である、安心の要路は戒にあると同時に又坐禪である。

此の禪戒は安心の要旨立命の大本、成佛の基礎、人道の根柢である。戒より入らんと欲せば戒より入れ、禪より入らんと欲せば禪より入れ、戒は之れ位大覺に同ふし、禪は是れ安樂の法門なり、戒に無量の功德あり。禪にも亦無量の功德



あり。此の禪戒の功德を含蓄したるものを三寶と云ふ。三寶とは南無歸依佛、南無歸  
依法南無歸依僧、と云ふ。「シルベシ三歸ノ功德ソレ最尊最上 甚深不可思議ナリトイ  
フコト世尊スデニ證明シマシマス」と歸依三寶の卷に示してある。又道心の卷には  
ハゲミテ南無歸依佛トトナヘタテマツルベシ、コノトキ十方ノ諸佛アハレミヲタレ  
サセタモフ縁アリテ、惡趣ニオモムクベキツミモ轉ジテ天上ニウマレ佛前ニウマレ  
テ佛ヲオガミタマツリ佛ノトカセタモフノリヲキクナリ。  
とある。一心に南無歸依佛と稱念する所に、禪の功德も戒の功德も所有佛法の功德は  
具はりて居る。道理も理窟も放擲して、一心不亂に南無歸依佛と稱名する時、凡夫  
地を遠離して、娑婆即寂光土と安心決定が出来ることは疑ない。

### 九、品性の修養

現今曹洞宗の教育機關は學校と僧堂との二つであるが、學校は兎角學解に流れ、僧

堂は又形式に陥り勝て甚だ遺憾である、學校も僧堂も共に兩祖の身心を體得し、學識  
を練磨し品性の修養を積むのが唯一の目的である。

先づ大學を初め中學校に於ても、兩祖の御思召を忘れてはならぬ、兩祖の御思召と  
は心地を開明して本分に安住するにある、其の心地を開明し本分に安住するには、所  
謂宗門の骨髓たる坐禪と宗乘の研參とに依らなくてはならぬ。故に假令學校と雖も  
曉天なり夜坐なりを勤めて以て本分に安住するの工夫を忘れない様にしなくてはなら  
ぬ。併し乍ら現今は一般に智識が進歩して來たから、宗教家たるものも是非世間の  
學問に通ずるの必要がある。宗教家は人を指導するの任務を有して居るのであるから  
一應の學識を得て置く事は尤も大切である。だから世間一般の普通學は如何しても  
修めて置かねばならぬ。されど學問學問と云ふて、學問に擒はれて宗門の骨髓を失  
てしまへば、恰も蟬の脱殻同然て全く命のないものになるから、此に大ひに留意し  
て、宗門の骨髓たる坐禪を疎にしてはならぬ。



操行を謹んで宗教家たるに恥ぢざる様にするには品性の修養が尤も大切である。學校に於ては教育者被教育者共に此點に注意をして、眞面目になつて欲しいのである、學校は實用的の人間を作らねばならぬ、大學を出ても布教も出來ず、法式の事も知らず、坐禪もしない様な事では、宗門の盛大を許る事はとても覺束ない。そこで大學にあつても坐禪を忘れぬ様、法式の事なども夜間になりとも稽古し、猶布教の事も練習して置かねばならぬ。

次に僧堂の方は曉天夜坐は勿論のこと、午前午後には必ず法益をすべきである。午前は努めて宗乘餘乘の講釋をなし、午後には佛敎史の如き歴史に關するもの、及漢學等を講義し、出來る事なら其他の普通學をも講じて只名目のみに止まらず、實を擧げる様にせねば宗門の隆盛は望まれぬのである。

元來曹洞禪の特色の第一は行解相應と云ふことにある。行と云ふのは行持である、行ひてあります。解と云ふのは知見解會など、續く文字で、學解即ち學問である、

學問修行と一口に云ふが、嚴密に區けると、學問と修行とは別である、それで學問は解の方で、修行が行の方である。宗門の上から見れば解と行とは離るべきものでない。本來解行證一等でなければならぬ、解と云ふたからとて佛法を理窟の上で知るのみを解と云ふのではない。實際に當つて佛法を明らかめ保任したのを眞實解と云ふのである。眞實の知解であつたならば行が自然に俱つて來るのである、これが佛法を保任した、即ち佛法が吾物になつたと云ふのである。斯くして佛法を自己日常の運足轉歩の上に任運に活現して行かると、これを行解相應の人と云ふのである。

今日世間では解と行とは全然別になつて居る傾きがある、例へば倫理學者は必ずしも道德家ではない、經濟學者は必ずしも金満家ではない。然し宗門に於ては單に學解の徒では何にもならぬ、所謂知行足と云ふて、智慧の眼が開き、直ちにこれが實行の上には現はれなければ何にもならぬ、否宗門に重んずるところは、この實行即ち行持にあるのである。眞實悟を開いた人は即ちこの行解相應の人の事を云ふのである。さ



れば行解相應の人ならば、茶に逢うては茶を喫し、平常心是道である、飯に逢ふて飯を喫す、平常心是道である。日用光中に佛法が活現するのである。

以上は單に禪一般に於けることのみならず、廣く通佛敎の理想である、ところで行解相應と口で言ふことだけならば容易いが、眞實に行解一致に行くことは却々難きものである。或る一物に捉はれて居る内は、行解相應には行かないもので、自己の胸中に問うて自分で試験して見ると、七八點も覺束ないのである、殊に悟つた悟つたと云ふて、却つて迷ふて居る人よりも甚しい、人道にはづれ人情に遠かつた行ひをして居る人は、眞實悟つた人ではない、眞實悟つた人ならば、直ちに行解相應の人であるべき筈である。

故に品性の修養を第一にして、眞個行解相應の漢とならねばならぬ、然る時は其人の威儀が直ちに佛法であり、其人の作法が直に宗旨となるのである、然るに胡說亂道の輩あり、動もすると威儀が佛法だ、作法が宗旨だと云ふて眞實の威儀作法もせず且又坐るばかりが禪ではない、行も亦禪、坐も亦禪で、あるから、寢て居ても佛法だと云ふて、修行を怠る漢があるならば、开は大なる心得違ひである。

序てだから一寸一言して置くが、怎うも禪門には放螺吹が多い、徒らに大言壯語して、悟つたやうなことを云ふて、平生の動作をかまはない連中がある、これ等は佛祖の眞意を見ず、この手段言句等の端末のみを見て居るもので、佛法と遠して遠し、禪を去ること十萬八千里だ、殊に禪録を放螺の土臺とするやうな禪者がある、是は實に獅子身中の蟲、佛祖の賊と謂はねばならぬ。假令千經萬論に達しても、如何に兩邊皮を鼓して大言壯語するも、眞實この威儀即佛法の理を徹見し、行取することがなかつたならば、眞の禪者とは許されぬのである、要は品性の修養を忽諸にせざるにあることを忘れてはならぬ。



# 十、洞門の禪戒

## 一 宗門の一大事

禪と戒との不二なることは「禪戒鈔」と云ふ書を読めば直に了知が出来るのであるが、此の二つは兎角別々のもの也と考へられ、殊に坐禪のみを以て禪宗の要旨と心得て居る人さへもある。此の間も衲に向つて「禪宗は坐禪さへすれば夫れて良いては無いか、授戒などは禪宗には不必要であらう」と、云つた人もある位で、世人は往々、此の禪戒の兩者に就いて誤解を抱いて居る。

由來、如來一代の佛法は戒法の上に立つて居るものであるから、禪宗で坐禪すると云つても、矢張り此の戒の上に立つての坐禪でなくては、決して眞の坐禪とは云はれない。禪は戒を俟ち、戒は禪を俟つて、初めて眞に禪宗の要旨に叶つたものと云ひ得るであらう、即ち禪と戒とは畢竟不二なものである。

先づ戒のことから辯ぜねばならぬ、禪宗に限らず、諸宗諸派は互に別れて居るが、何れも皆、戒を根本的に必要なものとするので、三學（戒、定、慧）の中でも、戒は第一に列せられてあり、出家の際にも第一に沙彌戒、次に菩薩戒、第三に坐禪と云ふ順序になつて居る、故に或は「佛家に住するは戒を基とす」と云ひ、或は「戒を平地とし、禪定を屋宅とす」と云ひ、虛庵和尚は榮西和尚に向つて「菩薩戒は禪門の一大事因縁なり」とさへ云はれた。

然るに兎もすると人は云ふ「禪宗では豚を食つても酒を呑んでも關ふものか」と、斯くの如きは戒法に縛られた所謂戒縛の人に向つて云ふのは良いが、若し禪定を重んずるの餘り、戒法を無視する様の事ありては大なる間違である。

如淨禪師は道元禪師に「佛戒は宗門の一大事因縁なり」とて戒法の重んずべきを諭された。禪苑清規には「參禪辨道は戒律を先とす」と云つてある位で、禪宗で戒法の大切なる事は、實に明らかなことである。



然らば戒とは何か凡そ物あれば法ありて、戒法は何物にても備はつて居る、コツブにも、水注にも、盆にも、天は高さ戒あり、地は厚さを戒とする、柳の緑なる、花の紅なる、松には松の法ある處が即ち戒、竹には竹の法ある處が即ち戒、宇宙の森羅萬象は一として戒法の現はれならぬ物は無い、是れが即ち禪戒である。

併し禪と戒とを並べて見る時には、戒には十種ありて、是れを十重禁戒と云ふ。

二 十重禁戒

第一不殺生戒——凡そ天地間の萬象は其儘不殺生戒である、殺さんとするも殺すこと能はず、否な殺す、殺さぬと云ふ相對的問題では無い、自分も、他人も、机も、本も、天も、地も、皆な佛性であるから、佛性平等、殺不殺の論量には渡らない、平等一枚の天地、殺す者と、殺さるゝ者との二つは無い筈、指は指を指さず、目は目を見ず、絶對の上より觀じ來る、宇宙は一の不殺生戒其者であるでは無いか。されど暫く相對の上より觀するに、凡そ戒は慈悲を以て土臺となす、慈悲は即ち同

情の念である、若し慈悲同情の心よりせば殺しても殺したには成らない。昔者、五百人の隊員より成る珊瑚珠漁夫團ありて、其の中の一人の思ふ様、若し他の四百九十九人を謀殺せば、悉くの珠玉みな吾が所有と成る可しとて、胸中に惡計を廻らした、すると他の一人が此の惡漁夫の心中を察して、吾れ今、一人の惡漁夫を殺さば吾れ自らは地獄を墮すべけんも、他の四百九十九人の生命には代へられずとて、遂に惡漁夫を殺し、釋尊の所へ行きて「地獄に墮つるや」と問ふ、釋尊は「爾は慈悲の心より一人を殺せり、故に地獄に墮ちず」と教へ玉ふた、日本軍人として敵兵を止むなく殺すのも皆これ東洋の平和の爲と云ふ慈悲同情の念からするのであるから殺生にはならぬ、一人を殺しても多くの者を助けたいと云ふ慈悲心からするのであつたならば、破戒にはならぬ然し無益の殺生は深く慎まねばならぬ。

近來、新聞紙を見ると、殺人が頻々として出て居るが、是れ等は多く殺生である、戒法を知らぬ者と云はねばならない戒法を破るの原因は大略三つある、第一は色欲、



第二は名欲、第三は利欲、色名利の三欲に迷つて自性靈明の心が曇り、同情の心が掩はれる、一茶の匂にも「やれ打つな蠅は手を磨り足を磨る」とあるが、自性靈明より照せば蠅の様な小虫さへも殺せない者である、或は「菓子やると云つて放さすとんぼ哉」て、菓子やると小供を欺く様ではあるけれ共、夫れが直に不殺生戒である。此の間、或る人が鰻を料理しやうとして生きて居るのを斬つた處が、鰻は三度飛び上つて其人の方を睨んだと云ふことを聞いたが、ほんとかうそかは知らないが、殺される事のいやなるは何でも同じことである、無益な殺生は誰人も慎まねばならない。

第二不偷盜戒——偷盜をするなと云ふ戒法であるが、自性靈明の上からは偷盜めないのである。天地は實に不偷盜戒の現はれてあるから、人々は自性靈明である。若し偷盜の心が起き来らば、夫れは自性靈明を失つたのである、法は不可得にして無我なり、無相なり、虚空の様なものである、虚空の無我無相なる、如何にして是れを盗み得やうぞ、實體ありと誤釋するによりて初めて邪惡なる欲心が起きて来るのであると

心得ねばならぬ。

支那の玄沙宗一大師は「盡十方界これ一顆の明珠」と喝破した。形あるものは一顆明珠、靈明なる珠であつて、盗むんとするも盗む能はぬもの、古人は又「人々脚下黄金の地」と云ひ、道元禪師は「佛道は人々の脚跟下に在り」と云はれた、絶對の上よりせば、私共の日日の行事が其儘靈明なるもので、盗不盜の問題では無いのである、此の見地に住して初めて不偷盜戒と云ふことが出来やう。

或る時、寶間比丘が佛に向つて「吾れ無漏清淨の悟を得んと欲す」と云へば、佛は我が物にあらざれば取るべからず」と、答へられた、そこで比丘は考へ出した、一體人間の常と云ふ處の我が物とは何であるか、身體は親より得たるもの、田地財産は先祖傳來のもの、六根六塵も畢竟するに永久の吾が所有物にあらず、天地をや、虚空をや、一として飽く迄も吾が物とすべきは無い、因縁假和合、即是空なるものである、鏡面上の影像、池水中の月輪、寶間比丘茲に於いて豁然として無漏道を得たと



ある。

此の即是空に體達せざるゆへ、偷盜の心は起き來りて、月給取は月給だけの仕事をせず、祿盜人となり、僧侶が布施を貰つて經を讀まぬと布施盜人だ、人々能く願れば長者の一子である、一念も偷盜の心が起ればそれは貧乏人と云はねばならぬ、大福長者の貧乏人にはならない様にしたいものだ。

第三不邪淫戒——自性靈明の上からは天地は一箇の不邪淫戒なり、凡そ法は愛着の念を離るゝ法は無着なるものである、本分より見來れば男女の相を見るも破戒の相となる、況んや邪淫をや。自性靈明より看れば男女の別はないものである。暫く相對的の上において男女を論ずるのみ、故に閑溪和尚は末山と云ふ比丘尼に「如何なるか是れ末山」と問はれた、名前に就ての問ひである。すると、末山は「不露頂」と、末山の山の頂きは容易に計るべからずとの答、閑溪は「如何なるか是れ末山の主」と更に山の主に問はれたすると、「男女の相に非ず」との答、佛性の根元より曰はゞ、決して

て男女の相は無い。

暫らく女となり、男となる、是れ技末の問題なりと雖も、既に男女あり、其の間の關係を等閑にしてはならぬ、家庭内となく、國家の事となく、治亂は多く閨門より興ると云ふ、慎まねばならない。經文に「一切の男子は我が父、一切の女子は我が母」とあるが、此の考を以て異性に對し同性に對す、恐らくは邪淫の弊少なからんか、但し釋尊は正淫を許したのであつて、只だ邪なる淫欲を禁止せられたのである。

第四不妄語戒——根元の第一義諦に至ると宇宙は一箇の不妄語戒である、天の高き、地の低き、鶴の足の長き、鴨の首の短き、鷺の白き、烏の黒き、是れ其の儘の不妄語戒、只だ夫れ不妄語戒、眞妄は凡夫の思量、一水四見の譬に等しい、同一の水にても天人は是を瑠璃と見、餓鬼は火と見、魚は家と見、人間は水と見る、人間は晝を明と云ひ、夜を暗とすれど、ふくろ鳥は晝を暗となし夜を明とす故に眞と云ひ、妄と云ふ、只だ其の物の業感である。故に曰ふ「理に順すれば善、理に違すれば惡」と、



理は佛性の理なり、理に順する善と云ふ順ぜざれば、悪と云ふ、悪は妄語である、絶對觀には眞妄は無い、眞の眼より見れば世界皆眞なり、妄の眼より見れば世界皆妄なり、相對の上より論ずれば妄語は口でのみするに非ず、白粉を以て人を偽る女あり、帯を以て人目を欺く姫もある、自働車に乗りて世上の人を偽るものあり、是れみな妄語である。大凡そ戒は慈悲を以て根柢となすと云ふ、慈悲を以て精神の根本とす、慈悲心より云ふ時は一として眞ならぬは無い、茲に於てか天地は一箇の不安語戒となるであらう。

第五不酤酒戒——佛教にて酒と云ふは獨り酒屋にて酤る處の酒を云ふのでは無い、無明煩惱は皆な酒である。又女も酒となる、男も酒となる、そこで男は女の酒に酔つて仕舞ひ、女は男の酒に酔つて仕舞ふ。或は身代を蕩盡して骨董の酒に酔ふ人あり金銭の酒に酔ふて残忍無慈悲となる人もある、自性靈明の曇を致すものは皆な迷の酒である。

衲の知れる家に「家山一呑居士」と云ふ戒名を書いた位牌が祠つて在つたが、是れは其の家の先代が酒の爲に家も、山も皆な賣り拂つて仕舞つたから菩提所の和尚がつけた戒名だと云ふことだ。又「蛇上戸」「風上戸」など云ふ酒呑もあるさうだが、かわず呑むのが蛇上戸、内ではあがらぬのが風上戸だと云ふのである、何れにしても酒は三十六の過失ありとて佛の禁じ玉ふた處、況んや自性靈明を蒙昧にする世上滔々たる愛欲の酒をや。

第六不說過戒——是れは人の過失を説く勿れと云ふので、元來、他人の過失と云ふものは、眞理として説けぬものである、自分の事を考へて見ると人の過失は説かれるものでない、自性靈明なるものが自然に曇ると云ふと他の過失を數へて見たくなる、人は修養によりて自ら不說過に至らねばならない。

但し他人を忠告するのは必要で、是れは決して說過では無い、家庭内の事は家庭内で忠告し合つて正すがよい、一國內の事は一國內で忠告し合つて正すがよい。併し決



して他の境域に属することを色々過失を擧げる必要はない、見よ、天は地の過失を誇らず、地は天の過を云はない、天地宇宙は其のまゝ不説過戒の姿ではないか、天地の姿に習ふ、人も自ら靈明になりて不説過に到るであらう。

第七不自讚毀他戒——自分を賞讃せず他人を貶毀せずと云ふのであるが、眞理の根源に至ると自他の區別は無い、衲より諸君を見ると衲が自で諸君が他、諸君より見ると衲は他で諸君は自、即ち自と他とは其時其場合によりて假りに付けた名稱にすぎない、即ち自他は相對的の者である、相對の見に執して自を讚し他を毀つと云ふは大なる心得違ひである。

但し是れは他を毀貶することの不可なるを強く示したもので唯自分だけを讚めることは罪にはならぬ、他の非自の是は謂はぬがよい、自分を讚めると同時に他を毀り、他を毀ると同時に自を讚めることである。唯だ自を讚めんとして他を毀つことは飽く迄も慎まねばならぬ。

第八不慳法財戒——宇宙の實相は不慳法財戒である、天は高さを慳まず、他は低さを慳まず、柳の緑なる、花の紅なる、決して自性を現はすを慳みはせぬ、然るに人のみありて慳しみをする、殊に法財を慳しみて、他人に施すことをせぬ、是れ實に自性靈明が雲に掩はれし爲めである。

縦ひ施す財なしと雖も人の施を行ふを見て隨喜すべし、法財も無しと雖も知識有つて人の爲に法を説むを聞たならば、隨喜の心を起すべし、然るを慳貪の人は他の施しを行するを見て隨喜の心なくして却つて他の施しをするを惜む人あり。見れ甚だしき破戒である、施すとは單に形態ある物質に就いて云ふのみで無い、志を施すのである、人に道を教へるにも丁寧親切ならば施してある。衲が會つて托鉢をした時に乞食が衲に金を恵んで呉れたことがある、或る時は又、薪を澤山に負ふた老人が足を止め、衲の鐵鉢の中へ施與金を入れて呉れたことがある。衲は其の時に實に云ふに云へない有り難さを感じた、誠心誠意と云ふものは恐ろしい力を持つて居る、凡べて施すと



は精神を施すのが第一である。親の命日なればとて一杯の水を捧げるのも、野菊の輪を供へるのも、或は軍人が君國に忠を盡くして戦場の露と消えるのも、悉く不慳法財戒である。併し儉約は慳心とは違ふので、不慳と云つても決して濫費を勸めるのは無い。

第九不愼慧戒——人もし法の無我なるを知らば決して腹の立つことは無い、法を虚空なりと考へて居れば自ら不愼慧戒だ、又、他人が悪いことがあつても懺悔したら許すが良い、衲の知つて居る人で夫婦喧嘩をした者があるが、一週間許り夫婦とも物を言はなかつたと云ふことである是れは實に良くない。

但し子の爲めを思つて怒る親の慈悲は愼慧とは云へぬ、東洋の平和のための戦宣の詔勅は慈悲の現はれてある、是れに就て思ひ出すは、此の頃、衲は或人に長命の法を問はれた事がある、衲は第一に宗教の信ず可きこと、第二に色欲を慎むこと、第三に怒らぬこと、の三ヶ條を主張した、怒り腹立つのは命を縮める原因になるのである。

假令や怒るやうな事があつても、怒つた後は丁度雷の過ぎ去つた後の様に颯張して仕舞はねばならない。

第十不謗三寶戒——佛法僧の三寶は謗らんとするも謗れるもので無い、此の謗れないと云ふのは自性靈明の叫びである、處が佛と法とは歸依することは出来るが僧は歸依する事は出来ない、時には謗りたくも成ると或人が云つたが、是れは佛法僧の意義を誤れる言であつて、佛とは平等なる真理のこと、即ち無差別を云ふ、法とは差別相を言ふので無差別が差別と現はれし狀が法である。法と成る上は法則がある、コップにはコップの法あり、水注には水注の法あり、各自に法を踏みて誤らざる處を法寶と稱する。

偕てコップにはコップの法あり、水注には水注の法があつて各々亂れず、差別にして平等平等にして差別、差別と平等と相ひ離れず之を僧と云ふ、僧は和合の意味である、各自差別して而かも和合する處あり、和合すれども而かも差別の用ある所よりし



て僧と云ふ。一つのコツブに就て見るもコツブと云ふ時は平等なり、差別の上より云へば斯の如く裡側あり外側あり上あり底あり、平等は佛なり差別は法なり、此の佛と法とが調和して用途に應ずるは僧である、故に形あるものは皆な三寶ありて、是れを一體三寶と云ふ、此の一體三寶の點より見れば僧も決して謗すべきものではないと云ふことである。

外に現前三寶、住持三寶などあるが今は略して置く、要するに一體三寶の旨を能く了知して決して三寶を謗してはならない、且つ又謗せられるものでない、以上が十重禁戒の略解である。

偈で十重禁戒は以上の如くであるが、自性靈明の暗くなりし時に不の字を頭へ着ける必要が生じて来る、不の字がつくと善、不の字が取れると惡、此の十重禁戒を三つにするると攝律、攝善、攝衆生の三攝淨戒となる。

更に三攝淨戒をつめると自己の心を清淨にすると云ふことになる、此の戒法を禪戒

とも云ひ、又は、金剛寶戒とも稱する、然らば禪とは何の事であるか。

三 如來最上の禪

禪と云ふことは是れを廣く見ると種々なるものを含むので聲聞には四諦の禪がある菩薩には六度の中に禪を説く、儒者には靜坐、老子には打坐、西洋人の冥想、其他初禪、二禪、三禪、四禪等の無色界の禪もある。

併し納は如來最上の禪を茲に論じて見たいと思ふ。即ち諸君の本有の性を假りに禪と云ふたので、禪は各人が本來具有する底、清淨解脱の法を指すのである、又、或人は禪は一心の異名なりと云ひ、或は佛の三昧なりと云ふ、是れ皆、禪門の禪である、禪は宇宙に遍滿して居る清淨の法であるけれども、修行せなければ顯はれて來ない、茲に於てか修養の必要が生じて來る。

併し乍ら、斯くの如きは單に一應の説明に過ぎぬ。前述の一水四見の譬の如く修行の深淺に依りて、禪を談ずるにも深淺があると思ふ、文字以外の響きを獲得せねばな



らない、只だ自ら認得するのである。

如來最上の禪は教外別傳不立文字なるを以て茲に説明すべき限りではない、只だ不  
斷の修養によりて禪の本領を認得するのみである。蓮は泥中より生じて而も清淨にし  
染汚を離れて居る、若し夫れ眞個に如來最上の禪を識得すれば、見聞一他に隨ひ去  
つて日用は渾て井の鹽を見るが如くに行くのである。汚穢極まれる浮世に處して心は  
霽風明月、自ら清淨潔白なることを得るであらう、恁麼の境界を得んと欲せば須ら  
く恁麼に修行すべきである。

以上、戒の説明と、禪の解釋との一應を終つた、然らば何故に此の二者は不二なり  
や、天地は同根にして萬物一體、水は遂に四見の觀察を與ふる如く、禪と戒とは人間  
修養の両面のみ、名は異なれども畢竟一に歸するのである。戒と云ふも禪と云ふも、  
何れに輕重ありと斷定することは出来ない。

戒のみにして禪なきも不可、禪のみにして戒なきも不可、又、禪の一方に縛せられ

たり、戒のみの一方に縛せられたりとするも、是れまた不可、由來、縛は一方に偏する  
より來るの弊、天下參禪の客、只だ單に坐禪することに急にして戒律の大切なること  
を忘れされ、戒法を遵守するに急にして坐禪することを忘れされ、然し坐禪の時は坐  
禪になり切れ、持戒の時は持戒になり切れ。

一水は四見異なる、禪宗の修養は一面即ち戒となり、他面即ち禪となる、禪と戒とは  
二にして不二、不二にして而も二、禪戒相關の理、是れを知らずして、如何にして禪  
宗の修養を積むことを得やうぞ。



中篇  
體露金風

禪の骨髄

100



## 一、慕直に努力せよ

永平寺は元と傘松峯大佛寺と云つたものであるが、寛元二年六月十五日に高祖上堂して「諸佛如來大功徳、諸吉祥中最無上諸佛俱に來りて是の處に入る、是の故に此地最吉祥」との一偈を御作りになつてから、傘松峯を改めて吉祥山と云ひ、大佛寺を永平寺と改稱するに至つたのであるが、是の偈の中にある最吉祥と云ふ文字を假り來つて、聊か慕直進前の要路を述べて見やうと思ふのである。

今年（こんねん）は御即位（ごそくゐ）のある年（とし）であるから、例年（れいねん）に比（ひ）して最も目出度（めいであ）い年（とし）である、即ち吉祥（きしやう）中の最吉祥（さいきしやう）の年（とし）であるといふはねばならぬ。年は斯（か）く最吉祥（さいきしやう）であつても國民（こくみん）たる我々（われ）が、例年（れいねん）と同じやうに此（こ）の目出度（めいであ）い最吉祥（さいきしやう）の年（とし）を空（く）しく送（おく）つてはならぬ。最吉祥（さいきしやう）の年（とし）は最吉祥（さいきしやう）の年（とし）として意義（いぎ）あらしめて祝（しゆく）し奉（たてまつ）らねばならぬ、此（こ）の目出度（めいであ）い年（とし）を祝（しゆく）し奉（たてまつ）り意義（いぎ）あらしめて、送（おく）るのには、其（そ）れは物質（ぶつしつ）的（てき）方面（はつめん）には幾等（いくら）も有（あ）らうが、精神（せいしん）的（てき）には只（ただ）一



つしかない。然らばそれは何んであるかと云ふに、道徳心を養ふことであると思ふ、即ち道徳心を養ふと云ふことには、心の底から悪心を取り去つてしまはなくてはならぬ。而して心を清浄にして、慈悲心を起し人の爲めと云ふ事を計からねばならぬ。佛法は色々に説いてあるが要する處は「諸惡莫作、衆善奉行」の八字に過ぎない、即ち煩惱妄想の諸惡を取り去つて、慈悲行の衆善を行ずるにある、今少し縮めて云へば心を清浄にすると云ふことより外にない、が此の心を清浄にする、諸惡をなすことなく衆善を奉行すると云ふことは、誰人も知つて居ることと極く安いことのやうに思へるが、其の實行は中々六ヶ敷い、世間では只理窟さへ解ればそれで知つたとか智者であるとか云つて居るが、我門下ではそうでない、眞の智と云ふものは行解相應と云つて、理窟を解して是れを實行して身につけねば智とは云はないのである。世間で謂ゆる知つたと云ふのは只覺えたと云ふまでに過ぎぬ、即ち彼の繪に描いた餅を見て餅と云ふものはこんなものであると云ふに過ぎん、餅を知るには繪を見た許りでは駄目である、

實際の餅を食つて見てその味を知らねばならぬ、謂ゆる文字の上で理窟のみでは畫餅を見る人て藝術家や宗教家は實際に食ふ人である。

此頃新聞を見るに、社會の上流に位して居る人て、随分破綻なることをやる人が實に澤山あるやうであるが、此等の人は口に云ふことを知つて身に行ふことを知らない輩である、謂ゆる最吉祥ではなく、不吉祥極まる事である、既往は致し方もないことであるが、今後はそんなことがあつてはならない。

我が承陽大師は辨道話の中に「三業に佛印を標し、三昧に端坐する時遍法界皆佛印となり、盡虚空悉く悟となる、故に諸佛如來をして本地の法樂を増し、覺道の莊嚴を新にす、及び十方法界三途六道の群類皆俱に一時に身心明淨にして、大解脱地を證し本來の面目を現す」とあるが實際其通りて、身と口と意との三業をさへ清淨にしたならば、一時に身心明淨となるのである身心清淨となれば頓に佛體に同じふのである。處で此の身に意の三業を根柢より清淨にするには、一番早道であるのは即ち坐禪



に依る可きであると思ふのである。一寸も油断を許さぬのであるから、彼の昔の剣道修行者に對して、一寸の油断もしない様に仕込のとよく似てゐる。即ち精神の油断を缺くことを大敵としてゐるのである、一體我々が迷はされると云ふのは精神の油断する處から悪魔が入るのである。坐禪の人とは左右源に逢ふゆへに如何に悪魔が入らうと思つても入る場所がないのである、坐禪にしる又世間のことにしろ、精神の緊張を缺くと云ふことは宜しくないことである、事業を一つなすにも油断と云ふものがあつてはならぬ。

昔支那の名僧丹霞禪師と云ふ方は、其の門下の宏智禪師と云ふ方を誡めて「暫時も在らずんば死人に如同す」と、仰しやつたが實際其通りで、我々の是の精神の緊張が一分間たりとも缺けて居つたならばその時は死人と同じことである。我々の特長と云ふその意識は、如何程でも發揮し開拓出来るところの可能性を以つてゐるのであるからして、我々は益々努力してそれを開拓して行かねばならぬ、其の開拓すると云ふ

ことは、理想を追ふて行く目的に達すると云ふことである。自己何物であるかを自覺するにある、即ち心を明鏡の如く清くすると云ふにある。本來清淨である處の自己の本性を見出して、何事をするにも自己本性の命に従つて行動するのが最吉祥である。翻つて現代を見るに、經濟の不調和からして、生活難と云ふ荒波が立つて來た、今日迄武士は食はねど高楊子とやつて居つた、謂ゆる大和民族も、此の荒波の爲めに酔はされて、飛でもないことを仕出かす様になつて來た、曰く詐欺曰く窃盜、曰く勞働問題、曰く何曰く何と、色々な事件が續出して來るやうになつた、なかには經濟と道徳とは衝突するなど、誤解する者さへ起つて來るやうになつた、何も道徳や宗教は經濟と衝突するものでない、最も生活標準の低下を唱導するやうな消極的救濟をしやうと云ふなれば兎も角、大に努力せよ、大に此の荒波を乗り越せ、其の荒波の大海に掉すには十分の用意をして出るやうにせよと教へる道徳や宗教が何で經濟に衝突するものか、此の激烈な生活難の渦中に飛び込んで行つても溺死しないやうに十分な用意



して行くには是非とも宗教に依らねばならぬ、宗教に依つて確固たる勢力を養成して  
不斷の努力を續けて行つて、生活難てふ荒波を乗り越えると同時に其の勢力を以つて  
最吉祥の行を行ぜねばならぬ、是の最吉祥の行は是が取りも直さず、親には孝となり  
君には忠となり、國に對しては愛國心となり朋友に對しては信となる處のものであつ  
て、謂ゆる誠の心其物である。

常住不斷の大努力を續けて行つて、或は精神的に最吉祥を得、或は物質的方面に努  
力して最吉祥を計り、是の目出度最吉祥の生涯を過すやう奮勵精進して送らねばなら  
ぬ。それには我見に拘つたり、情識に滯つたりしてはいけぬ、佛法修行には我見我慢  
を大敵とする、而して又決して油斷してはならぬ、世間ですら油斷は大敵であると云  
つて居る位であるから、一寸の油斷もせず、努力に努力を重ねて、堅き物を切るが如  
く勉めねばならぬ、若し佛法を修するのには是の我見我慢があつたら決して佛法は得ら  
れないのである。故に「少室六門に妄想無き時は、一心是一佛國、妄想ある時は一心

是地獄なり、衆生は妄想を作して、心を以て心を生ずるが故に常に地獄に在り、菩薩  
は妄想を観察して心を以て心を生ぜざるが故に常に佛國に在り」とある。

かくてこの一切の雑念を離れた處に、最吉祥の佛法は現成するのである。否、その  
雑念を離れた常體が取りも直さず最吉祥の佛法其物であるから、一向慕直に努力して  
妄念分別を除かなければならぬ。決して努力の無い處には目出度事や新清なることは  
現はれぬ、苦しむ處には面白味や楽しみは決してあるものではない、涙の底に眞の  
有難さを感じ、玉なす汗の中に云ふに云はれぬ愉快さを覺ゆるものである。清き心を  
以つて、大に努力一番するのが最吉祥と思ひます。

## 二、動靜一如の禪

禪の内容は非常に廣いのである、禪の廣義の意味から云へば、聲聞の四諦の法も一  
種の禪であらう、緣覺の十二因縁もまた一の禪と稱せられる、菩薩の六度の法も禪で



あらうし、如來最上の禪もまたその一となる。その外老子の唱へる打坐も、神道で稱する靜心といふのも、また禪といふことが出來やう。西洋ではよく冥想といふことをいふが、あれも一種の禪に外ならぬのである。如上の如く實に禪の範圍は、甚だ廣いものであることに注意せねばならぬ。

今云ふ如來最上の禪とは、一切衆生本具の性をいふのである。是れを生れると同時に、禪は具へて居たとも云ひ、または諸佛所證の三昧なりともいふて居る。それを靈鷲山上にて、釋尊は涅槃妙心と云はれたのである。これを第一に摩訶迦葉が相承し、次に阿難陀に至り、遂に二十八代達磨大師になつて、支那に傳搬された。是れ實に無上の大道にして、或は是れを一心の異名なりとも云ひ、起信論にては一心二門の一心を以て現してあるのはそれである。斯くの如く禪は心の現れであるから、或時は山と現じ、また或時は海と變じて盡くることがない、此意味に於いては、禪は宇宙の顯現であると稱しても敢て過言ではあるまい。

達磨大師はこの禪を二つに分けた、そして理入と行入と稱した。理入とは本分に安着すること、一切衆生本如來の智慧徳相を具有すと説き、生れると同時に有するものなれば、他を尋ねるに及ばずとするが如きである、行入は時間的に進んで行くので、修行するによりて功現るとするのである。

次に達磨大師より五代を経て、大滿弘忍禪師の時に及んで、禪は非常に盛大を來した。その門下から大鑑慧能と神秀との俊才が出た。當時神秀は七百の弟子仲間の上座を占めて居た、然して慧能は本來無一物、何れの處にか塵埃を引かんと禪を觀破し、神秀は時々拂拭して塵埃を引かしむること勿れと論斷した。當時の世論はこれが爲めに別れ、或は神秀を是として慧能を非とするあり、或は慧能を正として神秀を否とするものありて、實に紛亂極りなきものがあつた。

然しこれは兩者とも是非の論を以て難すべきものでない、兩者共に存せなければならぬものである、本來無一物とはこれ明らかに理入を稱するものにして、單に無一物



といふも、何も無き空虚なることをいふのではない、自性清淨心にして解脱せるものである。これが所謂慧能の稱する無一物の意味で理入を云ふたものである。神秀の唱導したものは行入であつた、朝から晩まで油断をせずに修行して、次第に階級を経て行くことをいふたのである。

然し一方向きの擔板漢ではいけぬ、世の中の人には十人十色であつて、酒の好きな人もあれば、また菓物の好きな人もあるのである。酒好きには菓物を向けても有難からぬと等しく、菓物好きには、また酒は歓迎されない。それと等しく法を聽く上にも、人根に或は頓なるものあれば、また漸なるものもあるのである。故に慧能の説と神秀の説とも、此意味からして決して優劣の附すべきものがない。

或る人はまた禪を見るに、宋朝以前の禪を理致禪となし、宋朝以後の禪を機關禪と別つものもある。前者は理を致すものであつて、道理を聽いて法を悟るのである。眞に理と一枚になりて、動かざるの境である。機關禪とは或は公案を授け、或は一喝を

食はし、一棒を與へて思量分別を破するのである、すなはち或る一の手段を採るのである。然れどもこの二者とても、機に應じ人に從つて殺活自在なるものにして、決して優劣の存することはないのである。古人の接得振りには、實に醫者の病に應じて藥を與ふるが如くであつた、風に臨んで、帆を擧げたるが如くであつた、順風か或は逆風なるかに從つて、帆の擧げ方を換へなければならぬ。成程禪とてもかくの如く、時には理入の上よりすることもあらん、また時には行入の上よりすることもあらう。これはみな作家の手段であつて是非すべきことではない。

總じて禪はその響を聽きとるべきである、禪は文字を離れたるものにして、然かも文字を離れたるものではない。禪は文字ありて文字がないのである、禪は一切の言葉を離れて、然かも一切の言葉を離れては居らぬ。或る人が悴が餘り云ふことを聽かぬ故に、勤當するから出て行けと云つた、するとその子は仕度して表門より出てんとするに、其處からは行つてはいけぬといふ、裏門から聽て出てんとするに、尙それも出



來ぬといふ、そこで子供は仕方なしに座敷より出てんとした時、親が奮然として貴様の根性を直さんが爲めてあるといつたさうであるが、意味は言葉にはない、言外の響きを聴取しなければならぬ。意味は文字の上にはないけれども、また文字を離れて意味はないのである。無語底にして、然かも有語底を現はすのである。禪は言葉の上にあるに非ず、無きに非ずである。

次に大慧と宏智とに至りて禪はまた二つに別れ唱へられた。宏智の方の禪を黙照といひ、大慧の方の禪を看話といふたのである。黙照は宛轉自在を唱へ、看話は公案を授けて括捉するのである。看話禪は直指である、黙照は宛轉である、宛轉の禪は眞綿て首をくゝらるゝが如くであり、どつちかと云へば意地が悪いやり方である。直指は直接に大將の陣に切り込んでその首を切つて歸るが如き英氣潑瀾たるの概がある。これに反して宛轉は四方より陣立てして、四方より順々と攻め立て、皆殺しにするが如きの概があるのである。

或はまた庭の草を採るが如くである。宛轉の方から云へば、採るには奇麗に根から採ると手間を要する、その代り直指は草を取るに早い早いけれども、上の出た部分だけ大略に取るのであるから、また後からズン／＼生へて來るのである。實に兩者共に一長一短、速く取るには直指にすべく、綿密に取るには宛轉に據るべきであるけれども、只宛轉のみに奔るも、また單に直指のみに奔るも當を得たるものとは云はれない。兩者並び採り用ひて、初めて眞作用を得ることが出来るのである。

曹洞宗の人にして、猶直指なる禪の手段を用ひたるは船子和尙である。此人が船守りをして居たときに、丁度夾山が來たのである、其の時こゝ云つた、釣針三寸を離れて何ぞ云はざるといふを最初の質問となし、三度までも河に叩き落したのである。三度目に水中にありて夾山が顛頭したのを見て、「竿頭の絲線は君の弄するに任す清波を犯さず意自ら異なり」と證明しましたのは實に直截の手段と見るべきである。また臨濟下の風穴禪師は直截を唱ふべきに、木鷄至夜に鳴く、菟狗天明に吠と云つた。これ



を有心とするか無心とするか、差別とするか無差別とするか、實に有心にもあらず無心にもあらず何とも分別せられない、實に宛轉の禪の様子があつた宛轉の禪は玉の盤に走るが如く、差別無差別に陥らないのである、風穴は臨濟下にして、宛轉を唱へ、船子は曹洞下にして直截の手段がある。

要するに禪は宛轉にして直截でなければならぬ、かくて直截にして然かも宛轉でなければならぬ。かくて初めて宛轉中に直截あり、直截中に宛轉ありて、達磨傳來の正傳の禪が現はれるのである。

### 三、釋尊正傳の禪

吾宗の開祖道元禪師が支那より歸朝後、問もなく御執筆になられたのが、今日禪門に弘く行はれて居る「普勸坐禪儀」である。禪師が本書をお認めになつた御精神は、即ち釋尊正傳の禪を一般の人々にお勧めするにあるので、夫より七年を経て「辨道話」

を御著述になつたが、併し禪師の思召は普勸、即ち普く勸めると云ふので、上智下愚を論ぜず、利人鈍者を簡ぶ事なく、何人たりとも、志さへあれば坐禪の出來ぬ者はないのである。

古より「笥でさへ一所に出て、長短あり」と云ふ如く、等しく春暖に逢ふて伸るところの笥ですら大小長短の差別がある、況して萬物の靈長たる、人根に利鈍あるは止むなき次第で、とても切つて揃へる様な譯には參らぬのである。

佛教では今生の果報は前世の業因に依ると説いてあるが、各々其顔の異なる如く業力にも相違があつて、上智下愚十人十種の根機は免れぬのである。道元禪師は是等の人々に對して、苟くも足に結伽趺坐の出來る人、手に法界定印、即ち左の掌を右の掌の上に安ず、兩の大拇指面ひて相拄ふと仰やつてあるが、かくして正身端坐の出來得る人であれば、智慧賢不肖、老幼男女の差別なく誰れでも出來るのが釋尊正傳の禪である。



然るに世には上根上智の人でなくては禪は修し得られぬ様に説き、又斯く思ふのは大なる相違である。道元禪師の御思召は決して左様ではない「專一に功夫せば正に是れ辨道なり」で、専心に努力して撓まざれば、何人たりとも坐禪の出来ぬものはないのである。故に最初に普勸と仰しやつてある。

坐禪の方式は前に述べし如く「正身端坐して左に側ち右に傾り前に躬まり後に仰ぐことを得ざれ、耳と肩と對し、鼻と臍と對せしめんことを要す」で、この方式が最も肝要なのであつて、凡て儀式の外に坐禪はない、世間ではよく形式に拘はるゝ杯とも云ふが、道元禪師の宗風としては「威儀即佛法」と云ふて、微塵の私心を挿まず、分別造作の音沙汰を離れ端然と坐した正當時に於て活佛法が現成するのである。謂ゆる聲色外の威儀知見の先の規則である。これが即ち釋尊正傳の坐禪である。

坐した端的が事である。この事よく理に通ずるので。抑も道元禪師のお思召は事理圓融にある。世間ではよく禪は戒法は要らぬ、一體禪僧が授戒會に行くと云ふが如き

ことは誤りであると云ふが、これは思ひ違ひの甚だしきものである。威儀が即ち佛法である如く、戒律が亦威儀である。禪戒一如に行くのが道元禪師の思召である。

道元禪師は實に一擧手一投足も等閑にはしなかつた。水一杯でも無駄にはツカワヌ下駄でも草履でも必ず前向に端然と揃へて、然る後座敷に上ると云ふ。この一些事が戒である、戒のある所即ち禪が潑刺として存するのである、何となれば足の躡先に至る迄全身是れ佛心の充實であるからである。物心一如の端的が禪の本領であるが、ともすると天魔破句の如き行爲を指して禪と心得る者のあるは甚だ遺憾とする所である。身心一如、物心合體の時は差別無差別を超越して、唯禪の活三昧となる、之が道元禪師のお思召である。故に苟も道元禪師の禪を修し、戒を體するに於ては、苟且にも玄關先に於て人の下駄を履いて行くと云ふが如き、不届な者はなくなる次第である。この理を會得すれば特更に保たうと云ふ考へがなくとも、自ら擧手投足禪と一枚にし、大道中の往來が出来る譯である、禪とは決して人を打つたり、徒らに大喝を弄す



るが如き行爲を指して云ふのでない。

されば天下を料理する宰相も一度はこの釋尊正傳の禪を修し、之を體得し、而して萬機に方りさへすれば決して國政を誤る様なことはないのである。

禪を修するには、先づ第一に自己の精神の本源を尋ねて見ねばならぬ。徒らに末にのみ走つては修行は出来ぬのである。濁流漫々たる春の隅田川を臨み見て、試みに這の濁流の那邊より流出せしかを想ひ見よ、深山の奥の青葉若葉に宿りし夕露の一滴は、やがて谷間に潺々たるいさゝ流れとなり、それが流れ流れて人里近き小川となり、而して遂に大川となり、濁流となりて海に注がれるではないか。

本來清淨の一滴水である、吾等も遡つて自己の本源を究めて見れば、佛とも神とも寸分の異りなき天真無垢の本心本性を具有して居るのである。而もそれが流れ流れて遂に隅田川の濁流にも似たる凡夫の有様とはなつたのである、これが氣が付かねばならぬ。道元禪師はこの有様を懇切に示された。

「道本と圓通、争てか修證を假らん、宗乘自在、何ぞ工夫を費さん」と、仰せられてある。誠に結構な言葉で、佛法の極致、禪の本領は此外にないのである。

道とは佛法の事である。元來性もなく名もないのであるが強いて名けて茲に道と云ふたのであつて、楞嚴經には道とは本性を云ふともあるが、本性とは即ち前に云ふ如く神佛と毫末の差別なき自己の本心である、之を今は道と云ふた。この本性即ち道は元來圓通、圓は丸くして缺目のない事、通は何處迄も行き渡ること、恰も水の濕潤の如く際限がない、無礙自在である。

吾等の本心は圓滿融通して少しも缺目なく、其根源は全く無罣礙自由自在なるものである。これをお互に持つて居る。されば今殊更に修證を論ずるには及ばぬ、修は修行て彼岸に渡るの船である、證は證得て迷ふた後の話である。吾等は元來道本圓通で迷語凡情の音沙汰を離れた、結構な彼岸に居るのであるから、今更船に用事がない、修證を藉らなくても既に無欠無餘の本源に安住して居る。



これは絶対の境致より言ふたのであるから、初心の人は間違もなき様に注意せねばならぬ。以上は道の本源、法の根本より禪の本面目を示されたのである。

次に「宗乘自在、何ぞ工夫を費さん」と、あるのも前句と同様の意味であるが、宗は一宗に限つたことを云ふので、即ち餅屋は餅、酒屋は酒で、其家々々の家風がある、乗は乗物であつてこれに乗れば至極安全なもの、而も自由自在である、別に工夫を要せんと云ふのは、前の修證と同じく船材である、宗の面目、禪の本領は迷悟執着を離れて居るから自由自在で、而も彼岸に安住して居る以上は船に用事は無い。

乍併ら、一旦迷ふた上は工夫辨道の力を假らねば宗乘自在の境には到り得ぬのである。修證を假らねば道本圓通の域には到り得ぬのである、この點は充分注意を要するのである。

以上僅か二句ではあるが、釋尊正傳の禪をば根源からさらけ出したと云ふてもよい位であつて、道元禪師の御精神はこの間に輝いて居るのである。

納等の修行も希くはこの地に到らんことを望んで居る、一般志を修養に傾くる人、並に參禪せんとする人々は、須く此心掛けを以て努力せられんことを祈る次第である。

#### 四、正傳の禪と神通

此頃は在家の方々が自から進んで坐禪をなさる、祖録の提唱を聽かれる、獨參もせられると云ふ様なことになつて來たが、是れは誠に慶ばしいことである。殊に宗門の若い坊さんの奮勵になる、納が先年大學に居た時分にはヤレ科學だの、ヤレ哲學だのと騒ぎ廻つて、餘乘宗乘の研究に力が入らない様であつた、坐禪でもしやうと云ふ者は曉天の星であつた、眼藏などを眞面目に聽く者は五六人位であつた、處が今度來て見ると大變な相違て有志で坐禪もやれば、眼藏を聽くにも息込みが違ふ、夫れは顔付を見ればチャンと解る、禪者は學問だけでは行かぬ、坐るのが肝要だと云ふことが本當に合點が行きかゝつたらしい、是れ皆、在家の方が坐禪をなさるお蔭けて宗門思想



が變つて來たのである。

各地方到る處に禪學の會が起つて居る、いつぞやも東海道とうかいだうの藤枝ふせだの禪學會ぜんがくかいへ行たが、土地の人々が信服して居る、陸軍の少將の階級かいきゆうにある人や、町長ちやうぢやうやが率先して盡力せらるゝので、外の者は精神修養の忽ゆるがせに出來ぬことを自覺して風俗の矯正きやうせいにもなららし、國利民福の基をも築くことが出來やうと思ふ、變則ではあるが今日の場合、在家の方々から奮發して貰ふて睡れる坊さんと呼び起して戴くより外に仕方がない。

坐禪の説明には種々あらうが、納は「入息陰界に居せず出息衆縁に涉らず」と云ふ語が一番適切だと思ふ、之れは達磨大師の師匠に當る般若多羅尊者が、東印度の國王の供養を受け乍ら一言の說法をもなさらぬので、王怪んで其所以を問ふた時、此答があつた「貧道入息陰界に居せず出息衆縁に涉らず常に如是經を轉ずること百千萬億卷」是れが、純粹の坐禪、正傳の佛法である。

陰界は陰處界の事、五陰十二處十八界の三科を略した言葉、衆縁は五塵六欲の街

其の委しい辯解は用不着だ。要は出た息は出たなり、入つた息は入つたなり、跡形を絶して居る、出入の其儘が自性を脱落して居る、平等の昏沈こんしんに居らず、差別の散亂さんらんに涉らず、此の居らずと云ふのがよい、此の涉らずと云ふのがよい。眞の坐禪は昏沈亂散を超越せねばならぬ、靜がよいと云ふて厭世に落ちては困る、賑かよいと云ふて樂天に走つても困る。向上門に入ると昏沈の禪になりたがる、向下門を出ると散亂の禪になりたがる、共に不是である。

三祖の信心銘に「有縁を逐ふこと莫れ、空忍に住すること勿れ、一種平懷なれば泯然として自から盡く」凡夫は有縁を逐ひ二乗は空忍に住する、上の枝も下の枝も矢張邪魔になる、根を切らねば本當でない、何處かへ片寄れば正傳の禪でない、美しい色を見ると色に迷ふ、目は見るの役目だからドン／＼見るがよいが其色を逐ふのが悪い、好い聲を聞くと聲に迷ふ、耳が聞くのが役目だからドン／＼聞くがよいが其聲を止むるのが悪い。



承陽大師は「縦ひ緊那迦陵讚歎の音聲を聞くも夕の風耳を拂ふ、縦ひ毛嬙西施美貌の容顔を見るも朝の露眼を遮る、已に聲色の繫縛を離れば自から道心の理致に合はんか」と、示されてある。吾人の本性は鏡のやうな者だ、美人も映れば老爺も映る、胡來れば胡現じ漢來れば漢現す。色の黒い奴は嫌だ、白粉臭いのがよいなんと云ふ取捨憎愛の邪念を交へはせぬ、お塚の鴨の如くならねばならぬ、紅塵萬丈の都の眞只中に居ても悠々閑々として千代田城の風致を添へて居る、鴨の本性を失却せぬ。

正傳の禪には臨濟宗だの曹洞宗だのと云ふ區別はない、青原和尚や南嶽和尚の胸中には看話禪も默照禪もない、宋朝頃から自然と禪風が異つて來て居る。古人が「臨濟禪は見地明白の弊あり曹洞禪は行履着實の弊あり」と云はれた、成る程その傾きはあつた。弊は除くべきであるが行履着實も見地明白も共に必要だ、言葉を換へて言へば曹洞の方には昏沈に陥る弊あり、臨濟の方には散亂に流るゝ弊がある、兩方が融和せねば眞の正傳の禪とは言はれぬ。

洞宗に屬する船子和尚は「釣針三寸を離れて一句を道へ」と、惡辣の手段を弄し、濟宗に屬する風穴和尚は「木鷄子夜に鳴く」と、宛轉の機要を示して居る。元是れ、人々具足個々圓成て我れの三昧我れ亦知らずと云ふ所に禪の妙味がある、此の境涯は佛眼も魔眼も窺ひ得べき筈の者でない、所謂冷暖自知するより外に方法はない、人根に利鈍あり道に南北の祖なし、今は震旦の初祖なる達磨大師の師匠、般若多羅尊者の金言を藉りて正傳の禪の消息を漏した次第である。

然し禪は參すべき者で講すべき者でない、佛經祖錄は獻立だ、獻立が幾ら結構でも腹はふくれぬ、だが獻立も必要である、獻立なしては甘ひ料理は出來ぬ、故に身心を決着するに兩般あり參師聞法と坐禪工夫之れである。佛經祖錄の研究、質疑問答の機會も等閑にしてはならぬ。されど最後の力を得るには耳と肩と對し鼻と臍と對せしめ兀々として坐定して、箇の不思議底を思量する端的にある、然らば禪は黙々として坐つて計り居ればよいか、と云ふにさうてはない。



禪は決して非活動の者でない、面壁打坐は即ち自由無礙の大活動をなす原動力を養ふのである、下手に作つた不倒翁の如く倒れ乍ら起きられぬ様な禪は正傳の禪でない、眞に正傳の禪に徹證すれば大神通が得らるゝのである。正法眼藏の中にも神通の巻と云ふがある、神通には色々種類がある、天眼通と天耳通と他心通と宿命通と神境通と漏盡通、之を六神通と云ふ、其外名相を擧げると澤山あるが、納は二種に別つて、小神通と、大神通として置く。

神通と云へば、奇々怪々なる不思議の如きことの様に見える、或は水上を行き、或は空中を飛び、前にあるかと念へば忽然として後にある。斯様なことを神通と云ふのではない、是れは業通とも云ふのであらう、各々其の果報に随つて異なる通力がある、水を泳ぐのは魚が上手だ空を飛ぶには鳥が上手だ。又依通と云ふて符を傳へ呪を誦へて奇妙な事をするが、若し符を失ひ呪を忘れる時は崇鬼の爲めに殺されると云ふ、是れ等は小神通とも言ふべきであらう、禪より得たる大神通力は瓔珞經に「天然の慧徹

照無礙なるが故に神通と名く」神とは天心、通とは慧性で、吾人本具の本心本性を見届けた上は、どうでも道に逆ふことは出来ぬ。

子としては親に孝、臣としては君に忠、夫婦相和し、朋友相信じ、各自其業務に精勵して天下泰平、是れ實に如是經を轉ずること百千萬億卷の當體である、正傳の禪の大活動である。喫茶喫飯も禪の神通、痾屎放尿も禪の神通である。

慧照大師は「色界に入つて色に感せられず、聲界に入つて聲に感せられず、香界に入つて香に感せられず、味界に入つて味に感せず、觸界に入つて觸に感せられず、法界に入つて法に感せられず」と申されたが、斯の如きは是れ禪の大神通力である。

### 五、佛誕生に就て

四月八日は我が本師、大聖釋尊の降誕し玉へる大吉祥辰である。依て降誕に因み、聊か生の根源より吾等佛弟子たるもの、修行の眼目を述べ、一場の葛藤を打するも亦



是れ如來法供養の一分と心得る次第である。佛典の中には四生と云ふ事が説いてある。即ち胎生、卵生、濕生、化生の四種がこれであつて、一に胎生とは胎藏に托して生ずるを云ひ、二に卵生とは殻に依りて生ずるを云ひ、三に濕生とは濕氣をかりて生ずるを云ひ、四に化生とは無なるところに忽然として生ずるを云ふ。

金剛經の新註を見ると「人と旁生とは具さに四生あり、諸天と地獄と中陰とは是れ化生、餓鬼は化生と胎生とに通ず」とある。其他鳥類魚類の如き卵生のもの、蛆蟲の如く濕を藉りて生るゝ濕生のもの。以上の四生は三界受生の差別こそ分類されて居るが、一切の衆生は生死の業を造りて、枝條花葉三界二十五有に偏滿して居る。故に生を論ずる時には悉く以上の四生を出づることは出来ぬのである。

人間が四生に通ずることは餘り聞かぬのであるが、經論の中には例證を擧げて人間が四生に通ずることを述べてある。

婆娑論の中に云く「昔し商人あり、海中に入り一羽の鶴を得た。其鶴が後に二個の

卵を生みしに、其卵漸く濕熱し、不思議や二人の童子が生れた、童子容顏尤も端麗にして凡相を離れ、長じて出家し沙門となり、修行して遂に阿羅漢果を得たり、小なるをば鄒波世羅と名け、大なるをば世羅と名く」とある。是れ即ち人間卵生の證據である。又賢愚經を見ると「過去世に於て大國王あり善住と名く、其頂上に腫物あり、後ち轉展してその濕熱の所より童子を生む、童子顔貌端相也、之を頂生王と名く」と、是れ即ち人間濕生の證據である。

又經律異相と云ふ書の中には「池水あり、一人の女子ありて其の池水の中より化生す」とあり。又涅槃經には「佛、比丘比丘尼優婆塞優婆夷等と遊行の時、比丘尼あり阿羅婆と名く、忽然として池水の中より化生す」とある。是れ即ち人間化生の證據である。以上は經論に現はれたる、人の四生を具して生ずるの據り處である。

併乍ら、佛菩薩を初めとして、一切の人々は胎生なるが通途であつて、宇宙間に生息するものは其數多くとも此四生を出るものはない。されども、納が考へるに、四生



の外に生ずるものが無いとは限らぬ。何となれば法界を胎として生るゝものもあらう、法界を卵とし、法界を濕とし、法界を化として生るゝものもあらう、生や全機現の生もあるであらう。能く研究を要することである。

獨逸の有名なる神學者フイネル氏は人間の三生を説いて居るが、其説頗る面白い。人は三遍生れ變るものである、人始めて母胎に宿る、これが第一の人間生活にして、即ち胎内に生れたのである。胎内にある間は暗黒状態にして何等の活動もない。次に母胎を出づる第二の生活にして、感覺もあり知識もあり自ら活動もするのである。即ち第一の生活状態よりは遙かに自由の生活である。然れども肉體のために大活動は出来ぬ。何となれば肉體があるが故に疲勞が覺へ、疲勞すれば休息を要す、休息しては更に新しい活動を興し、眠りては休み、醒ては働く、是れ必竟肉體があるが爲めである。然るに一度肉體が破滅すると、所謂世に云ふ死である。第三の生活は死後の活動である、既に肉體を組織したる物質的なるものは悉く四分五裂して、精神は肉體の爲めに

支配されない、故に疲勞もなく從つて休息も要らぬ。即ち個人我を離れて社會我となりたる自由の境界である。

以上の所説はフイネル氏の第三生活であるが、釋尊も第一胎内に宿ることは同じである。且つ又出胎生活も同じであるが、釋尊は所有學問藝術に達し、然る後生老病死の四苦を深く感ぜられ、發心出家をせられたるは佛道の家に生れたる第三の生活である。夫より修行をせられ一見明星の下に於て大悟徹底せられたるは、佛世尊と生れたる第四の生活である。更に横説縦説三十餘會の説法をせられて、七十九歳を一期とせられ涅槃の雲に藏れさせられ玉ふは謂ゆる肉體の離散にして、大精神界に生れたのである。

釋尊御一代、學徳兼備福智圓滿の徳化は生滅變遷せるものではない。是れ即ち第五の生活であつて、大宇宙の大神靈と一致して縁に隨ひ感に趣く底の普遍的の感化である。



「ワレラガ行持ニヨリテ諸佛ノ行持見成シ諸佛ノ大道通達ス」とある。今日に於ても  
 衲等釋尊の法服を着し、釋尊の言行を守り、釋尊の座に坐せば、釋尊はいつも其の處  
 に生れ、現成するのである。「轉展して之れを行ぜば如來の法身常に在して滅せず」と  
 ある。滅せざるは即ち生じつゝあるの義にして、諸佛の大道を通達すると否とは今日  
 吾人の行持如何にある。

世尊當時下生して、天地を指して周行七步、目に四方を顧みて曰く「天上天下唯我  
 獨尊」と、後に禪門の奇傑雲門和尚拈して云く「我れ當時若し見ば一棒に打殺して狗  
 子に與へて喫せしめん貴むらくは天下太平を圖らん」と、亦大智禪師は「雲門の一棒  
 虚りに行ぜず」と、示された。瞿曇の白拈賊は暫く措く、天下の諸人各自妄想分別の  
 晝賊人を活捉して、如何と工夫して見よ。必ずや精神界も太平無事となる。實地修行  
 の處眞實修養の處に世尊は時々誕生せられて居るのである。

## 六、修養實驗談

### 一 記憶惡るさに深夜三更の洗足參り

お互に其職業の何たるを問はず、修養の忽せにすべからざるは勿論のことではある  
 が、特に出家の身は尋常一様の修養では、到底一人前にはなれぬのである。衲等も幼  
 少の折より誠に物覚えが悪く、其爲に如何程苦心したか知れぬ。

郷里は遠州の相良町、昔は一萬石の城下であつた、其處に生れて、六歳の時出家を  
 して川崎在、中村の長興寺と云ふ禪寺に入つた。經を教はる時分よりの話ぢやが、師  
 匠の慶道と云ふ人は誠に嚴重な方で、今云ふ如く物覚えの悪い衲はお經を聞いても直  
 に忘れて了ふ、忘れると叱られた外に打たれる衲の頭は當時殆んど瘤が絶えなかつた。  
 八九歳の頃は實に何の位難儀をしたか知れぬ、深夜人靜まるの時、兩親が慈愛の程を  
 思ふては、涙の潜然と下るを覺えた。



烏兔早々、十四歳になつた。例によつて記憶はよくない、如何にしたらばよからうと、百方苦心をした結果、神佛の庇護を仰がうと云ふ氣になつて、丁度、長興寺の門前に白山権現があり、裏山には天満宮が祭つてある、それに祈願をしゃうと決心して、夜三更草木も眠る眞夜中を、密に床を抜け出て、洗足參りを初めたのである。境内とは云ひ乍ら霜の凝結して居る寒中の事、只一心に物覺えの善くなりたさに、七日間人知れず祈つたのである。

二 二十三年振に親子對面共に無言の涙

神佛には祈願をしたものゝ、復習の努力は實に一通りの苦心ではなかつた。師匠は前云ふ如く嚴格一方の人で、夜になつても行燈をつけることを許さない、暗夜に經文の復習は出來ず、復習せねば忘れる、忘れれば打たれる、如何にしたものかと思ふて、終に馱線香を三本ばかり本堂より持つて來て、これに點火して幽かに見ゆる經の文字を辿つては、復習を續けた、線香の煙が縷々と立上つては眼に泌み込み、翌日になつ

ても眼は痛む、併し一通りの經文は爲に記憶することが出來た。

十九の時である、衲の目今住職をして居る遠州の大洞院で長老になつた。當時この寺の住職にならうとは夢にだも思はなかつたのが、實に因縁と云はねばならぬ。

立身を終へて、初めて相良の兩親を訪ふたのである。六歳の時その暖かき懷を離れて、以來十數年間一回だも郷里に歸らなかつたのが實に久々で、歸つて見ると、兩親は何にも云はずに只ハラ／＼と涙を流して居る、自分も泣くより外に詮術もなかつた。後にて聞けば、兩親は衲が出家をしてから十數年の間、唯の一日だも衲を忘れたことがない、衲の方では親を忘れて居たが、親は我子を思はぬ日とはないと聞いて、此時泌々と兩親の有難いと云ふ感が胸に涌いた。

僅か六歳で寺には遣つて見たものゝ、今頃は淋しさに泣いては居らぬかと密に家を出て、寺の軒先に立つては中の様子を立聞して、衲が淋しさに泣いて居る其聲を聞いて、一旦出家をさせて今更可哀想だとも云ふて入られもせず、外に立つた儘共に泣い



て家に歸つた事など度々あると語られた。聞き了つて親の慈悲の斯くばかり深きものかと一層痛切に感じた次第である。

三 便所内の讀書と發奮努力の大動機

斯く迄兩親に心配を掛けて出家はしたものゝ十九歳迄は毎日の如く炊事と草取りばかり、時には寺男と共に山中に萱刈迄やつた。爲に勉強の餘暇は殆んどない、依つて四書の如きは假名付の本を懐にして、或時は便所の内にて讀み耽り、或時は山に持參して置き忘れ、雨に打れた本を再び取りに行つた事すらある。

然るに當時有名なる佐田介石翁「視實等正儀」と云ふ器械を以て遠州に演説に來た、納も其演説を聽に本師の許を得て行つたのであるが、其頃には誠に珍らしいので、非常なる人出である、其時つくづくと感じて同じ人間でも、學問をして演説をすればあの人出である、何んでも人間は奮發をせねばならぬ、自分の如く毎日炊事に草取りばかりして居つては將來到底名を成すことは出來ぬ。

時に咄嗟の考へて、直に書面を認めて本師へ願書を出した。當分修行の爲め膝下を遠かるが、後日は必ず報恩をするから——と云ふ意味のことを書き送つて、濱松町の天林寺と云ふ曹洞宗の専門學校へ入學する決心で出立した。然るに學校に入るには保證人がなければならぬ。演説を聞いた足で直に來ては見たものゝ、只着のみ着のまゝ、元より保證人杯のあらう譯はない、其時思ひ起したのは、大洞院で立身の折、典座の役をして呉れた宗圓和尚が、池田の妙法寺と云ふ寺の住職になつて居るので、早速事情を打明けて保證人になつて呉れるやうにと頼んだ、和尚は「逃げて來たのは悪いが、御身の勉強は納がよく知つて居る、必ず立派な者になれば師恩も報ずる事が出來るか、保證人になつてやらう、併し學資金は別に支給されぬ、夜具も入用ではあらうが、別にない、これでも持つて行け！」と、一枚の古い黒毛布を借して呉れた、之を持つて學校へ參り願書を出して首尾よく入學が出來たものゝ、さて困つた事が出來た。

四 筆墨の料に困りしこと、終生の恩人



夫れは外でもない、例の學資金の問題であるが何分にも着替一枚持たず、衣は寒冷紗のしかも所々切れて居るのを着て居るばかり、其頃の事であるから、天林寺では檀家へ支校の坊さんが順番に法事や葬儀に行く事になつて居た。學資の不足なものはこれに補う事を得るのであるが、衲はあまりに汚い風をして居るので、寺ではやつて呉れぬ。年に二回の江湖會があると大衆と共に出會はさせるので、其布施を貰ひ溜めては筆墨の料にした位。併乍ら、夜具を購ふの餘融は出來ないので、每晚横にならず、机に凭れたる儘の坐睡を續けて居た、寒夜眼が覺めれば直ちに讀書をする、この様子を見て居た同寮の小林吟道氏が「随分寒いだらう、私と一所に寝なさい！」と、云ふて呉れたので、爾來小林氏と共に寝ることになつた、實に其時の有難さは忘れ得ぬ。學校は六級に分れて、三年で卒業と云ふのであつたが、試験がよく出來ると二級一所に飛ぶことが出來た、時に西有穆山禪師が可睡齋の住職をして居つて試験に來られたが、衲は幸ひにして一年間に五級迄進み、二年目には卒業する事が出來た、これで

師恩の一分を報ずることゝ喜んだ。

全科卒業後、直ちに學監になつて、此時、妙法寺の和尚さんに頼んで本師に委細を云ふてやつた。師匠は非常に喜んで直に衣服を新調し、法衣、小遣錢迄送つて寄した。

五 重なる本師の不幸と逆境の恩聴！

滿つれば缺くる世のならひ、學監になつて居て間もなく本師逝去の訃音に接したのである。衆寮寺は其後法兄が住職することになつたのであるが、若しも衲の弟子になれば、今後學資金を支給仕様と云ふので、云はるゝまゝに大學林へ入學すべく上京した、時は明治十五年、恰も吉祥寺より麻布へ移つた時であつて、衲は廿四歳頃であつたらう。

大學は當時九級卒業の時であつたが、重なる不幸は再び身の上に降りかゝる恰も八級迄卒へて、間もなく卒業と云ふ間際に、第二の師匠が不慮の災難に罹つた、并は宗務所の保管金三千圓が、何時の間にか、紛失して居たとの報知、然るに疑ひの眼は師



匠の身に及ぼして、爲めに學校は中途退學の止むを得ない有様となつた。

其時ある易者に見て貰ふたが金は早晩出るとの事であつたが、師匠は責任を果すために「お前は直に歸郷して可睡齋内にある専門支校の教師になれ、但し無給金で勉めてくれ」と、云ふて來たので、早速左様して居る間に眞の盜人は出て來た。其時師匠の爲とは云ひ乍ら無給の教師になつて居るのは氣の毒であると言ふ一般の同情で、再び大學林に残る一級を濟ませるやうにとの注意もあつたが、聊か感ずるところがあつて、直に西有禪師の座下に投じ、前後十三年禪師の左右に侍して専心宗乘の研究を續け、兎に角今日あることを得るに至つたのである。

### 七、西有禪師の徳化

#### 一 正法眼藏の精神と權田老師の來書

衲は學業に於て大學は僅か一級を残せるのみで卒業しないで了ふた、并は自分では

聊か感ずるところがあつたからである。當時西有禪師は可睡齋に住職をして居られたので、朝夕其左右に侍して居つたが、西有禪師は人の知る如く近代稀有の禪門に於ける學者であつたと同時に、亦眼藏家であつたと云ふことは今更云ふ迄もない。

この年、可睡齋で眼藏會を開くことになつた、天下の龍象は争ふて參聽を申込んで來る、其時丁度、今の豊山大學長をして居らるゝ權田雷斧師が、西有禪師に書を寄せられた、其書面の大意は

今般の眼藏會は實に有難く奉存候、老師も法門に各ならず淺深相兼ね轉法輪願上候眼藏こそ大小顯密三乘一乘の法門を貫接し或は顯あり密あり、亦三又一其圓融を談するや、或時は六大周遍不思議の趣さあり、これによつて古人は顯密の中間に居すと談じ又或人は横流一切佛教にして一代圓教と判ず、老師よろしく御熟考に預り申度候

小衲も萬障綜合出會可致候間御道愛の程願上候



とあつた。西有禪師はこの書面を手にして言はるゝには、流石、權田老師は學者丈あつて、種々なる方面から眼藏を見て居らるゝが、惜しむべし未だ學者らしい所がある、眼藏はかゝる三乗等の臭味を離れて居るところに眞價を認めねばならぬ。權田老師は眼藏を或ものにあて箴めて見て居らるゝが、この當て箴めた所を悉く抜けて了ふたのが、即ち承祖の賜物である……云々。

納は禪師のこの話を聞いて、實に胸底深く無限の感慨に打れた。自分は因縁あつて、斯くは洞門の流れを杓んで居り乍ら、御開山の精神である正法眼藏を一生涯知らぬては實に恥入た事である、如何にもして之を知得せねばならぬと云ふ氣になつて、爾來、西有禪師の門に參することゝはなつた。

二 未明粥を喫して一里半を眼藏會に

學徳兼備の西有禪師は、時既に御老體であるにも不拘、意氣壯者を凌ぐばかり、四季を通じて或は江湖會に、或は授戒會に、南船北馬、應請に寧日なきの有様であつた。

而も洞門の授戒會と云へば、戒師は隨分骨の折れるものである、それにも西有禪師は戒師の勉むべきことは決して缺かさず、曉天の坐の如き必ず衆より先んじて上殿すると共に、其御垂誡の如きは婆心微愾なること恰も慈母の赤子に對する如く、諄々として戒法の事を話される。

其度毎に納は實に有難く感じて、全く得難き老師家である、希くば將來禪師の側を離れず修業したいものと決心したのであつた。其時は明治十六年頃のやうに思ふが、引續十三年間全く禪師の左右を離れなかつた。

禪師は其後可睡齋を退隱して、東海道之島田町なる傳心寺に五六年間閑居された。其間も貳拾名の雲納を置いて常に其接待に當り、一日、十五日には親ら衆を率いて托鉢に廻つて居られた。當時、納はこの傳心寺を距ること一里半、天徳寺と云ふに住職をして居たのであるが、老師は常に納に向つて「僧堂を開いて雲納を世話したがよろう」との勸告、依つて直に禪師を師家にして僧堂を開單して四來の雲兄水弟を世話



することになつた。

禪師は誠に法に親切な人で、此時も傳心寺に百日間の眼藏會を開くことになつた。が毎日午前八時に初まるので、衲はこれを聴講する爲めに、天地寂莫たる午前三時には床を出て、曉天の坐に即き、朝課諷經を終へても東天未だ紅を呈せぬ、朝の飯臺には日々ランプを點じて粥を喫した。然る後に一里半のところを懸け付けるのである。かくして臘八の時でも、必ず禪師の側に侍して垂誠を聞き托鉢の時も禪師に随つて出たのであるが、何時も町端れの松並木迄行くと、御老體のこととして、疲労の氣味が生ずるものと見え「どうだこゝらで一吹やらうか」と云はれては、衲を顧みるのであつた。

三 西有禪師山上の法筵と古代の名僧

衲が天徳寺に住職するに至つたのは、實に偶然の因縁であつたが、其前相摸の吉濱と云ふに英潮院と云ふ曹洞宗の寺がある、この寺こそ西有禪師の初住の地で、禪師に

は思出の深き土地である、禪師が可睡に居られた時のことであるが、助化師に請はれて江湖會に參り、衲も出會することになつた。一日裏山に衲を連れて行つて、鬱々たる杉林を指して往時を物語られて云ふには

衲が初めてこの寺に住職した時には、この山には一本の樹木すらなかつた、衲は後世誰の爲になつても宜からうと考へてこれに杉苗を植付けて置いたのだが、自分の年を重ねると共に杉もこんなに大木となつたのぢや、衲は雲衲を督して杉苗を植えるのが毎日の作務で、其休みの時間を利用しては此山で法筵を開き宗乘を提唱して聞かしたもんぢやが實に日月の經つのは早いものぢや、何でも若い間に勉強努力せねばならぬぞ！

と言はれたが、西有禪師のこの話の如き、遙か古代に遡つて考へれば彼の黃檗と臨濟とが松に就いての商量はあるが、實に近代に珍らしい老徳と、身に浸む有難さを感じずには居られなかつたのである。



四 假堂の轉法輪はやがて食輪を轉ず

然るに英潮院には、この江湖會に參つたのが因となつて、其後、衲に住職して呉れ  
と云ふ請待狀が禪師の方に來たと云ふので、禪師は衲に與へられた。

これと殆んど同時に前述の天徳寺からも衲に住職の請待狀が來た、この寺は曾つて  
禪師が般若心經を講ずるために參つた折、其隨行て衲が演説をしたことのあるのが因  
縁となつた。それでは禪師に近い方を選ぶと云ふことになつて、英潮院には請狀を返  
還して天徳寺に住職することゝはなつたのである。

偕て住職にはなつて見たものゝ、荒れたる庫裡の一棟があるばかりで、本堂はない。  
本堂は無くとも法輪を轉ずるには差支ないと決心して、直に西有禪師を請して江湖會  
を執行したのである。此時は慥か禪師は五位を提唱して、衲は從容録を讀んだやうに  
記憶して居る。

江湖會が了へて其後間もなく、内海の性海寺に禪師は西堂に請されたので、衲は後

堂に行つたが、雲衲を三名ばかり内鑑寺として置いたので、殘してあつた白米三俵は、  
再び歸山した折には奇麗に無くなつて、あるものは借金ばかり、其上更に拾餘名の雲  
衲を連れて來たゝめ、明日から直に食するものがないと云ふ有様。

食物がないからとて連れて來た雲水を還す譯には行かぬ、其日直に一同を引連れて  
檀中を托鉢に廻つた、然るに有難い事には集まるところ、米麥が合せて四俵あまり。

夫より非常なる嚴冷枯淡の生活を大衆と如同にして、終に寺債を返却するの運びに  
至つた。これ迄の枯淡は實に自分乍ら驚く位、數年間、葦酒山門を入らぬは言はずも  
がな、豆腐半丁すら買はずに通したのである。

五 數年間の嚴冷枯淡に築し法堂禪堂

かくして數年は夢の間に過ぎた。今は寺債の心配もなし、一つ本堂を建設したいも  
のと發願して、檀頭塚本藤藏なる人に相談をして、衲も百圓や二百圓は寄附をするか  
ら、是非共出來るやうにと云ふと



貴僧が熱心に負債を整理して、今日では雲水迄養ひ、更に寄附をして迄と云ふなら、私も及ばず乍ら賛成をして、兎に角檀頭分に相談しませう！

と、直に四十餘名の重立を召集して「方丈は豆腐一丁食はずに節儉をして本堂を建築したいと云はるゝが、皆様の御意向は——」と云ふと、お互に顔と顔とを見合せして善とも悪いとも云はぬ。夫ては賛成の人は丸を書いて、不賛成の人は三角を書いて呉れと、衲は巻紙と筆とを人々の面前に置いたが殆んど申合せたやうに丸が出たので、其場で寄附の割附をする、寺の山からは材木を伐り出すと云ふことになつた。寄附金も二年で集める筈のが其後間もなく出来て了ふたので、もうかうなると欲が出て、更に禪堂建築の擧となつて、これも無事に落成する。次に夜具布團、膳腕の果より莊嚴道具迄悉く立派に出来上つた。

そこで再び西有禪師を請して盛んなる授戒會を執行したのであるが、この時、衲は説教をして「この寺に初めて住職をした時には實に可哀想な位何にもなかつた、あるものは一枚の紫唐縮緬の法衣一着、ある婆さんが茶碗五箇にお盆一枚寄附をして呉れたのが始まりで、今日かくなつたのは偏に御開山の徳とは申乍ら、亦西有禪師の高徳に基く所以である」と今昔の感を述べた時には、實に涙が潸然として法衣の袖を濡らしたのである。

六 深く感ぜし西有禪師の高風と行持

其後も禪師が西堂に出れば衲は後堂に、禪師の助化先きは殆んど隨行をしたのであるが、其間衲はたとへ後堂役であらうとも、何時も大衆と如同にして、作務等は一回も缺したことはなかつた。禪師は人に向つて「秋野は身體も丈夫でないのに餘りに勉め過る」と云はれたとのことであるが、衲は深く感ずるところがあつて、かくは行持の上に現はれて居つた迄の事である。

西有禪師は、常に「何でも人間は災難に逢はぬやうに心掛ねばならぬ、それには羅漢拜をするがよい、羅漢拜の功德は決して身に災難のあることはない」と云はれて、



御老體になつてからも、決して羅漢拜はお略しにはならなかつた。

衲も禪師の風によつて羅漢拜は毎朝必ず行ふのであるが、それかあらぬか従前は一回の災難にも逢つたことはない、併しこれは在家の人には一寸實行は出来ないから、在家の居士大姉には、別に稿を改めて、禪の上より簡易なる修養方法を講じたいと思ふ。

### 八、脚跟下冷風生ず

#### 一 如何に修養すべき

今や春去り夏來りて炎塵萬丈、虚空は將に火を吐かんとす。これ修養に志す者の好箇の試金石ではあるまいか。彼の白居易の句にもある通り「人々避暑走如狂」と、全く、いくら金があつたとて金に依つて涼しくはなるまい、いくら學問をしたからとて學問に依つて涼しくはなるまい、いくら名譽があつたからとて名譽に依つて涼しくはなる

まい、宜しく各自の精神に向つて、如何と修養せねばならぬのである。

修養は執着を去るにある、佛法の目的も執着を去るに外ならぬのである。彼の解脱上人の語に

執着なきを淨土と云ひ、執着あるを穢土と云ふ

と示めされてあるが、凡べてこの世界は吾人の執着心の有無に依つて種々に變るのであるから深く注意をせねばならぬ。

#### 二 螺髻梵天と舍利弗

佛陀は此事を維摩經の中に説かれてある、即ち螺髻梵天がこの世界を見た時には「天宮の如くに見え、舍利弗がこの世界を見た時には「丘陵坑坎荆棘礫土石諸山穢惡充滿」と云ふて汚れた娑婆に見えた。

これ世界に淨穢の二相がある譯ではないが、見やうに依つて種々なる變化があるのである、淨土や自在天宮は決して遠方にあるのではない、維摩經には



欲レ得ニ淨土一當レ淨ニ其心。隨ニ其心淨一佛土淨、

と仰ふせられてある。心を淨くするには先づ第一に足ることを知らねばならぬ、貪慾非道の心を以て淨土に往くことは思ひもよらぬことである。而してすべての執着を去つて、慕直に向上の一路に向つて歩を進めるにある。かくして深心清淨に至るの時、其人の平常底の往來が即ち自在天宮の往來である、喫茶喫飯が即ち淨土門中の活三昧となるのである。故に暑いと云ふも、寒いと云ふも、要するに執着心を離れさへすれば、寒暑に追はれて自心を没却するやうなことは斷じてないのである。

三 火水元と定相なし

凡て法には定相がない。同じ水でもよく之を用ひれば、一日も無くてはならぬもの、特に夏期に於ては水ほど結構なものはない、然るに一朝悪く用ひる時に於ては、或は堤防を破壊し、或は人畜を害ひ、實に水位厄介なものはない。火も亦水と同じく、人間の生活には一日も缺くべからざるものではあるが、若しも悪くすると、或は市街を

焼き、或は山林を焼き、數百年の苦心も一夕の大火に依て灰燼に化して了ふことは珍らしくない。

されば火を呼んで悪とするか、水を呼んで善とするか、共に善惡を離れて居る、火水に善惡の定相はないのである。故に縁に觸れて或時は善ともなり、或時は惡ともなる。

古へより一水四見と云ふて、同じく水ではあるが、之を天人が見れば瑠璃となり、人間が見れば清涼水となり、魚類が見れば宮殿となり、餓鬼が見れば火となる。然らば瑠璃と見たのを以て眞理とするか、水と見たのを以て眞理とするか、宮殿と見たのを以て眞理とするか、火と見たのを以て眞理とするか、天人が見れば瑠璃が眞理で、人間が見れば水が眞理魚族が見れば宮殿が眞理で、餓鬼が見れば火が眞理である。

乍併、共に其當を得たものではない、各々見る者、自身によりて種々なる判釋を下すもの、水其ものには必竟一切の相を離れて居るのが眞理である。



四 先づ法を會得せよ

されば一步を進めて、法を合點せねば眞の安心が出来ぬ、法は善惡を離れた不染汚のものである不染汚の法を合點すれば初めて平常底が皆法の上に安んじて、法を離れずに、任運行作すべて法に相應して行くことが出来るに依て、初めて安心決定が出来るのである、この法たるや寒に非ず暑に非ず、寒暑共に離却して居るのであるによつて、須らく先づ法を識得せねば、眞の清涼三昧は我がものにならぬ。

往昔、長水和尚瑯琊の覺に問ふて曰く

清淨本然云何忽生山河大地

と、覺、答へて曰く

清淨本然云何忽生山河大地

長水翻然として、清淨不清淨の二見を離脱した。離脱して見ると山河大地皆悉く清淨本然の姿ならぬはない。

誰ても相對差別の見を持つて居る間は駄目だ。この二見を離れて見れば汚ないと思ふた世界も悉く清淨の姿と見えるのである。

又、僧あり寶徹禪師に問ふて曰く

如何なるかこれ風性常住無處不用底の道理と、寶徹禪師何にも云はずに、イキナリ扇子を使ふた。僧怪しみ見て、風生常住にして處として周ねからずと云ふことなからんには、敢て扇子を使ふには及ばぬではないかと反問を試みたのである。時に禪師答へて

汝たゞ風性常住を知れりと雖も未だ處として至らずと云ふことなき道理を知らずと、成程風はち前の云ふ通りに宇宙に遍滿して居るが、併し扇子がなければ風が出てはないか、と誠められたとのことである。

五 精神修養の根本義

修養も其通りて、法は宇宙に遍うして居るが、修養せねば我ものにはならぬ。修養

八、脚跟下冷風生ず



の方法は種々あらうが、我禪門に於てはすべてを開放して坐禪を好む人には坐禪より入るがよい、信仰を求むる人は信仰の上で修養するがよい、其時には三寶を存念して「南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧」と三歸戒を唱へよと勸める唱へると云ふ上には理窟は要らぬ、たゞ唱へさへすればよいのである。三歸戒が面倒であれば唯「南無歸依佛」丈けてもよい、朝夕之を唱へることを實行すれば必ず精神の修養になるのである。

御開山承陽大師は、正法眼藏の歸依三寶の卷に

ミルベシ三歸ノ功德、ソレ最尊最上甚深不可思議ナリト云フコト、世尊既ニ證明シマシマス、衆生マサニ信受スベシ……イタツラニ各々ノ一佛ノ名號ヲ稱念センヨリハ、スミヤカニ三歸ヲ受ケ奉ルベシ。

と仰せられ、又同じく道心の卷にも

マタコノ生ノヲハルトキハ、フタツノマナコタチマチニクラクナルベシ。ソノトキ

ラスデニ生ノヲハリトシテ、ハゲミテ南無歸依佛トナヘタテマツルベシ。コノ時十方ノ諸佛、アハレミヲタレサセタマフ。縁アリテ惡趣ニオモムクベキツミモ、轉ジテ天上ニウマレ、佛前ニウマレテ、佛ヲオガミタテマツリ、佛ノトカセタマフノリヲキクナリ眼ノマヘニ、ヤミノキタランヨリノチハ、タユマズハゲミテ三歸依ヲトナヘタテマツルコト、中有マデモ後生マデモオコタルベカラズ。カクノゴトクシテ、生々世々ヲツクシテトナヘタテマツルベシ。

と、懇ろに示されてある。故に衲は信者にはいつも三歸依を唱へよと勸めて居る。

六 修養に理窟は不要

坐禪でも三歸依でも、朝夕缺かさず實行してさへ居れば、識らずく底の法に合うが故に精神の修養にはこれ位よいことはない。

衲はこれを自ら實行して未だ曾つて缺したことはない。朝は必ず一時間坐禪をして、夫から行持を讀み、次に寮舎に歸つてから室中佛祖禮をやる。

八、脚跟下冷風生ず



かゝる修養は決して理窟で判釋すべきものではない、寒時に處しても、熱時に處しても、唯佛祖の行履に依て實行しつゝある迄である。寒暑の時節に束縛せられて東奔西走其苦惱を脱せんとするが如きは本分底には遠して遠してある。

修養に志す者は、順らく自己の心中を徹見して、暑熱の苦痛に追ひ廻されぬやう努力するに於ては、自から脚跟下涼風の生ずるを識得する時節が来るであらう。

### 九、佛教の根本義

現今我日本國の佛教は、十三宗三十餘派の分派があつて、一見する所各宗各派其唱導する所が異なつて居る。然し外見は一寸異なつては見ゆるけれども、同一佛教の根本から分れた支派とすれば、必ずや其歸する處は唯一でなければならぬのである。經文にも「佛以一音演說法、衆生隨類各得解」と云ふてある、今日てこそ大乘、少乘、顯教密教、權教實教、聖道易行などの區別は出來て居るが、これは後世各宗の祖師が

佛所説の一方面を以て一宗を建立し、對機を化益せん場合の、教相判釋から始まつた上のことで、佛の説かれたる教の上には決して其様な區別がある譯のものではない。

佛は三十歳の臘月八日に明星を御覽なされ、一大事を了得せられて後、四十九年間或は華嚴を説き、阿含を説き、方等を説き、乃至般若、法華、涅槃等を説いて、二月十五日涅槃の夕に至る迄横説緊説總て三百餘會の説法をせられたが、是等の説法は何れも衆生の機根に應じて説かれたまでの事で、佛の御本懷には唯衆生の迷妄を脱せしめ、解脱の妙境に游化自在ならしめ様と云ふ慈悲落草の外にはないのである。

然るに衆生には鈍あり、利あり、賢あり、愚ありて、佛の説法を聞いて、各自の機根に隨つて是を解了したのである。されば高祖承陽大師も「如來在世には全く二教なく全く二師なし」と説かせられた。全く佛教の目的は一切衆生をして佛と寸分異らぬ、人々具有の佛智見を開發せしむるにあるのであつて、佛教は宇宙の終始を解釋する哲學でもなければ又人生の意義を究めんとする理論でもない、是等の事も佛教の經



典の中には無論含まれてあるけれども、佛教をして直ちに學問であると思ふのは間違ひである、佛教の目的、佛教の根本義は夫以上にある、然らば其目的は何であるかと云ふに、自己の身心の迷妄邪念を根本より解脱して、其働きを實社會に活現すると云ふとにあるのである。更に言葉を変えて言ふならば身心脱落脱落身心が最終の目的である、自己の一心の歸着點を求め、即ち安心立命する、而して處世上に之を活用すると云ふとにある。唯斯様に云ふたのみでは何でもない事の様であるが、是が却々出來難い事で、迂濶に聞流さるゝものではない。

何故かと云へば吾人の心は色に遇へば色に迷ひ、聲に遇ふては聲に執着する、名譽の柵、利欲の羈に纏はれて、不知不識の間に自己本來の面目を昧まされて居るのが、吾人の常であるから、却々一心の歸着を得、涅槃寂靜の岸に遊ぶと云ふことは容易の事ではない、古人も「うつり行くはじめもはしも白雲のあやしきものはこゝろなりけり」と詠まれてあるが、成程吾人の心は白雲の如く、朝々谷間を出て、飛び、夜々青

山に倚りて眠るのである、此の豹變極りなく、移動定まりなき心を一定の安住所に落付て寂然不動の妙境界を得せしめ様とするのが佛教の根本目的である。

以上の目的に達する第一の要件は信仰である、信仰のない人は佛教徒と云ふ資格のない人である、信仰は佛道修行の全體を通ずる基礎である。承陽大師の御言葉に「淨信一現する時自他同じく轉ぜらるゝなり」と御示し下された如く、淨き信念が一度發現すれば、自己も他人も悉く、凡夫の醜骸を轉じて、佛位圓滿の究竟位になることが出来るのである。其他信仰の基礎に立つのでなければ道を成ずることの出来ないこと云ふことを經論に澤山説かれてある、即ち華嚴經には「信あらば能く必ず如來地に到る」とも亦一信は道源功德の母なり、一切諸の善法を増長す」とも示されてある、是等に由つて見ましても信仰は須臾も離るべきものでないことが明らかである、この信仰によつて佛教の根本義を闡明せられんとを希望する次第である。



### 十、萬法禪に歸す

萬法禪に歸すと云ふのであるが、元來禪と申しますと四禪八定の禪もあり、二乘聲聞には聲聞の禪あり、菩薩には菩薩の禪あり、如來には如來の禪あり、その他老子には打坐と云ひ、儒教には靜坐と云ひ、又西洋には沈思とか冥想とか云ふこともあるが、是等も矢張り一種の禪には相違ない。併し乍ら納の今云ふ禪はこれ等を指すのではない、況んや又彼の檀戒忍進禪慧と云ふ六度の中の禪でも無ければ、戒定慧と云ふ三學中の一の禪でもない、即ちこれ等一切を包含して居る廣大無邊なる禪を云ふのである。さて此の廣大無邊なる禪とは何であるか、即ち諸佛所證の三昧、如來の本心がそれである。古人も禪は一心の異名なりと云つて居る、然らば今日各宗各派と分れては居るが、これ等は何れも禪の分出であると云へる。又一切藏經も禪の註釋に過ぎぬとも見る事が出来る、故に禪は本來無名である、依つて古人はこの消息を「從來形名な

く天真性相を亡ず」と、謂はれてある。

これを禪家にては強いて名けて如々と云つたのである、如々とは何にかと云つた所で、モ一それは理盡き語窮つた所であるから何とも云つて見やうがなからう、何と云つた所がそれだと當りやうがない。併し又何とても名けられる道理があることを知らねばならぬ、依つて南岳は「説いて一物に似たるも即ち中らず」と云はれたのもこの道理である。六祖大師は本來無一物と云はれた、本來無一物と云つたからとて、貫ひ出しのない乞食の囊や、貧乏人の米櫃のやうに空壺と云ふのでない、一切萬有が其儘本來無一物と云ふのである、即ち法の本法は元無法であつて、山川草木人畜家屋と云うたところで、皆無法のものである、有り乍らありつぶれてある、定相を認めないのである、故に金剛經にも無所從來亦無所去とある。今此一本の扇子とてもさうである、今因縁に依つて扇子と云ふ集合體となつて居るが、元來扇子に扇子の定相はないであらう、暫く紙と竹と糊と要めとに依りて造られたばかりで、それをバラ／＼に分



散すれば扇子と云ふ實體が何所にあるか、畢竟一物である。扇子は扇子に非らずと云へるので、人は暫く之れを扇子として居るまでの事である。一切萬有もさうである、世界もさうである、非世界のものを暫く世界として居るまでのことである、世界は只四大和合の集合體で之れを分離せば矢張り無一物ではないか。

斯の如く一切萬象究め來たところて何等の所據はないのである、之れを金剛經には應無所住而生其心とあつて、一切萬有は無住の所に住して居る、住して居る其のまゝが無住の様子である、山と云ふのも川と云ふのも草と云ふのも木と云ふのも皆因縁和合の上の話で、山に非らず、川に非らず、草に非らず、木に非らずと云ふべきものであつて、即ちそれに非らざるものをそれとして居るまでの事である。

さて斯の如くにして一切萬有は假有のものであるが、さればその外に實在即ち何にか別に真有なるものが有るであらうかと云ふに、決してさうでない、畢竟假有のものが眞實相である、世界そのまゝが非世界であると同時に、非世界そのまゝが世界であ

る、此の他に世界はない、真空そのまゝが妙有である、即ち本來無一物であるから永久無盡藏である、永久無盡藏であるから本來無一物の當相である、無盡藏なる萬有は皆是れ禪の本領とする所である。

古則の中に「盧陵の米作麼の價ぞ」と云ふ言葉があるが、この作麼の價がよい、禪といふは「作麼の價」を名けたるものである。一切萬有は價有りて價はない、價なくして價がある、畢竟「作麼の價」といふものより他に云へやうがない、何物を拈じ來るも皆此の作麼の價ならざるもの塵一本もない、早い話が、火を御覽、朝から晩まで晩から朝まで、これ程大切なものはない、柄は煙草を喫はないが、煙草を好きな人は、先づ寢床で目を醒すと直に一服吸はねば起きられぬと云ふ、それから起きる、茶を煎る、飯を炊く、暖を取る、燈火を點する、一日として無しには暮らせぬ、これ程大切な吾々に有益なものはない、ところが其の反對に又火程有害な火程恐しいものは無いとも云へる。吉原の大火の如き、大阪の大火の如き、山形の大火の如き、其有形無形に與



へたる損害は一通りや二通りではない、十善法語の中にも、一人の娘が火の付いて居る薪で鹿を打つたために鹿が狂ひ逸し、村に這入つて稻倉に延焼し、象の小屋が焼けた故、象が怒つて田畑を荒し、隣國にまで暴れ廻つたために、遂には十年間の戦ひを開いたと云ふことが書いてあるが、斯う考へて見ると火程恐しいものは無いであらう。して見ると火と云ふものは有害であらうか、有益であらうか、善と云ひませうか、悪と云ひませうか、畢竟作麼の價てはなからうか。

水もその通り、夏の田植時に農家にては實に水は命である、又都に於ても水は一日も無くては叶はぬ、茶を呑む、飯を炊く、入浴洗面一として水の御蔭ならぬものは無い。火が大切である如く、水も又甚だ大切であることは皆承知の如くである。

さて之れも又有害とか悲しいとかいふ方面から見るとこれ程有害で恐しいものは無い、人畜貨財に常に損害を興へて居る事は實に夥しいものである。舟を浮べるは水である、又船を覆へして人命を奪ふも又水である、水は果して人にとつて利益あるもの

であるか、害あるものであるか、善であるか、悪であるか、何れにも定める事は出来ない、畢竟作麼の價と云ふより外ない。又明とか暗とか云ふやうなこともさうである、人間は晝は明、夜は暗と云つて居るが之れが眞理か怎うか、第一鼠だの梟などは却つて暗の方がよく見へる、彼等は却つて晝は暗で夜が明と云ふかも知れぬ、明と云ひ暗と云ふも、見る物に依つて觀察が異なる、明暗果して何れが虚、何れが實であるか、畢竟これも作麼の價と云ふべきである。

斯くの如くにして、山河大地を清淨本然と見る人あれば、清淨本然なるものを山河大地と見る人もある。人生を苦の海涙の谷と悲觀する人もあれば、浮世は春の如しと樂觀して居る連中もある。人生果して苦か樂か、苦でもなく樂でもなし、苦樂相半ばするのでない、悟つて見れば六道の衆生も如來常住の法身であるが、迷ふから如來常住の法身も六道輪廻の衆生と見ゆる、人生は要するに又これ作麼の價である。迷悟とは恰も、迷が澁柿ならば悟は甘乾の如きものである。煩惱は菩提の種因である、生



死と云ひ涅槃と云ふも畢竟するに同一物の両面である、生死あればこそ涅槃がある。高祖大師も「生死は佛のちなり」とまで仰せられてある、佛教に依つて生死を脱れ出んとするのは大なる誤解にて、唯、生死即涅槃と生死を明らむべきである。或る僧が大隋和尚の處へ行つて「劫火洞然として大千俱に壞す、未審、這箇壞か不壞か」と尋ねた、這箇と云ふは人々の心性の事でも云ふか、たゞ這箇と云つて諱名犯さぬ所に大に響がある、其響を聴取せねばならぬ、大隋は「壞」と答へた、僧は壞と聞いてモ「滅亡すること、合點し「怎麼ならば他に隨ひ去るや」這箇ばかりは不生不滅のものと思ふたのにもこれ破滅するのであるか「ソウダ其通り他に隨ひ去る」と、大隋が答へた、此僧心配でならぬ、這箇と云ふ物は常住と思つて居た、依つて此の僧又龍濟和尚の所へ參つて「劫火洞然として大千俱に壞す、未審、這箇壞か不壞か」と又問ふた、龍濟曰く「不壞」サア僧は先づこれ安心したが、また落着かないから更らに「何んとしてか不壞なる」と、念を推して聞き正すと、龍濟「大千に同じさがためな

り」と答へた。

さて又一苦勞が出来た、大千が壞すると云ふから、其の大千と同じならば這箇も壞するに相違ない、此僧先きに、壞と聞いて心配し、今は不壞と聞いて益々不安である、實に憐れむべき僧である。元來此僧は壞と不壞との量見に轉ぜられて龍濟や、大隋が、壞不壞と云ふその響を聴き得ないのである。不壞と聞きて喜び、壞と聞きて愁ふるの

は迷である、元來壞不壞には要はない、大隋や龍濟は壞不壞を離れて這箇を説いて居るのであるけれども、悲しいかな此僧未だ其の地に到らず、何んでも法を合點しなくては駄目である。

一切萬物皆無常變遷の理を脱すること無くして其儘が常住である、永劫不滅なるものである。元來壞にあらざる不壞にあらざる、壞不壞を超越し這箇を見得せねばならん、此這箇を合點した人が眞の作家と云ふものだ。作家と作家との話ならば壞と云ふた所で不壞と云うた所でチャンと這箇の商量になるのである、丁度、東京の仕事師の會話



の様に「オイ怎うだい」「ウン」「さうか」「よからう」と云うた具合に、側から聞けば何の事か少しも分らぬが、御常人達には好く了解つて居る。之れが實に這箇の神通と云ふものである、這箇は決して高い所や遠い所にばかりあるものではない、到るところ這箇の活三昧である、それを知らないのはたゞ當方で知らずに居るだけの事で、這箇は宇宙一杯になつて居る、觸所觸目這箇ならざるものは一物もない。それ故に、香殿は撃竹の聲にて悟り、靈雲は桃花の色にて悟り、大雅堂は蛇の草に這入るを見て畫法を明らめ、懷素は雲の閃くを見て草書三昧を會得したと云うてはないか、見來れば人々の日用の行持皆これ這箇の神通ならざるはないであらう。

瀉山が曾て晝寢をして居つた、弟子の仰山が來たから瀉山はフト目を醒し仰山を見て云ふのに、衲が今夢を見たから判斷し來れと云うと仰山立るに鹽水と手拭を持ち來た、瀉山洗面し了つた所へ此度は香殿が來た、すると瀉山は香殿に向つて、衲は今寂子と一乗の大神通を現じたと話をする、香殿も直ちに一杯の茶を持來りて瀉山に

進めた、すると瀉山大に喜び、二子の神通驚子日蓮よりも勝れたりと云つたとのこと、之れ實に大神通である。

凡て語の響を聞き言外に宗を悟るのが大切であつて、之れを日用の左之右之に應用する處に、禪の活用がある。道元禪師の謂ゆる「三業に佛印を標し、三昧に端坐する時遍法界みな佛印となり、盡虚空悉く悟となる」である、身と口と意との三業を清淨にするのが禪である、禪とは自性清淨心の異名である。故に盡虚空悉く悟となるのは是れ即ち佛々所證の三昧である、然らば即ち一切諸法は悉く禪に歸せざる者はないのである。



後篇 全提不起



## 一、一字不説の端的

吾禪宗は釋尊より嫡々相承したる所の宗旨である、佛心印を單傳したる宗旨であるから、他の宗旨とは大分異つて居るのである。釋尊の言葉に「吾に正法眼藏涅槃妙心あり摩河迦葉に付屬す」とあるが、此語は禪が佛法の總府たる所以を明示したる言葉であつて、乃ち正法眼藏涅槃妙心は佛心印の換へ言葉である。故に佛心印を相續したるものは、實に吾禪宗である。

禪は佛一代御説法の所由の根本を把捉し活用するところの宗旨である。言葉を換へて云へば佛の悟得せる宇宙の原理、天地の妙法を悟得するので、單に一經一論等の主義に依つて立宗せる他宗とは大分意味が異つて居る、この意味をば、從容録中の一節たる「藥山陸座の話」に就いて述べ様と思ふ。

垂示

一、一字不説の端的



示衆云。眼耳鼻舌。各々有二能。眉毛在上。士農工商各々歸一務。拙者常閑。本分宗師。如何施設。

本則

舉。藥山久不陞座。院主白云。大衆久思三誨。請和尚爲衆說法。山令打鐘。衆方集。山陞座。良久便下座。歸方丈。主隨後問。和尚適來許爲衆說法。云何不垂一言。山云。經有經師。論有論師。爭怪得老僧。

頌云

痴兒刻意止啼鏡。良駒追風顧鞭影。雲掃長空集月鶴。清寒入骨不成眠。これは例の從容録中の一則であるが、垂示は別に難かしいこともない。讀めば解るやうなものである。「眼耳鼻舌各々一能有り」眼には眼の働きがある。即ち長短方圓の形を見るとか、青黄赤白黒の色を見分けるとかの働きの有つて居る。善いものも見れば悪いものも見る。悪い方ばかりに多く見とれるから困る。耳にはまた耳の働きの

あつて、種々雑多な聲を聞き分ける、聲にも亦善いも悪いものいろいろとある。鼻は鼻で種々の香を嗅ぐ働きを有つて居る、香にも亦善いも悪いものいろいろとある。舌は舌で種々の味を知る働きを有つて居る、味にも亦佳いも不味いものいろいろとある。兎に角眼耳鼻舌各々それ々の働きの有つて居るが、ひとり眉毛といふやつは何の能力もない。そのくせ「眉毛上に在り」て、一番上に威張つて居る。或る人の話に、それは眉毛だつて何も無能といふわけではない。頭から汗が流れて落ちて來るのを受け止める能力があるといふ。そんなら夏だけの必要で、冬になつたら要らないわけだ。そこでまた或る人は、どうも何の能力もない奴が一番上に位するといふことは不都合千萬だといふので、之れを引き下ろした所が、眉毛が上に附いて居らぬと、どうも顔が變て見られたものではない。そこでまた矢張り上つて呉れと頼んで、一番上に置いたといふ。そんな馬鹿な話もあるまいが……トコロが此無能といふのが裏らいたので、無能であるから上居れるのだ。孔子も「君子は器ならず」と云つて、器となつてはその

一、一字不説の端的



器だけの用にしか立たぬ。水瓶となつては水瓶だけの用、コップとなつてはコップだけの用しか出来ぬ。その如く人間も一藝一能の士では、その藝能だけは傳へるが、上に立つことは出来ぬ。無能でなければ以て上には立てぬのである。と云つて初から無能では困る。實は一能や一藝ぢやない、萬能に秀て居て、而も無能の如くてなければ價がない。「士農工商各々一務に歸す」て、社會の何れの階級を通じても皆それく職業があつて、その務めを有つて居て勉勵せねばならぬ。トコロが「拙者常に閑なり」何の職業にも従事することの出来ぬやうな拙劣な人間は、別に之れといふ務めがないから、いつも安閑と暇がある。拙者とは抑も何だ「大巧は拙に似たり」と云つて、その能があつて而も能らしい所が見えぬ、學問があつて而も學問に誇らぬ。大權を自由にする地位にありながら、無暗に大權を振り廻はすでもない、大功があつて而も大功に誇らぬ。乃木大將の如きは即ち今云ふ拙者である。一藝一能を得、一務に歸すといふ連中が彼れは是れ論をして見たところてむしろをかしい次第だ。乃木さんよりツツと

下の方の人間が、乃木さんの人格が解る筈がない、若し乃木さんに世上紛々の議論を聞かしたら笑つて居られるだらうと思ふ、低い人格を有つて居ながら、高い人格の乃木さんを批評するなどは、まるで摺木を以て綿入の上から撫でるやうなものだ。一向要領を得られぬ話で、乃木さんからすれば、何の痛痒を感じぬ話である。實に乃木さんは自ら能を能とせず、大功あつて功に誇らず、全身是れ至誠の人で而も至誠らしく振る舞ふでもない。無能にして而も見上げるべき人、拙者常に閑なる底の人である。納に言はせれば「三業清淨な人」これだけで乃木さんの人格は盡せると思ふ。即ち身の行動に於いても、口に言語を出すにしても、意に於いて考へるに於いても、いつも自ら欺かず、人を欺かず、君の爲め、國の爲め、社會人類の爲めになるやうなことばかりを、行ひ、言ひ、考へる。身と口と意との三業が清淨になつた人であると思ふ。

拙者とは即ち斯ういふ人を云ふので、初から拙者閑なりと云つて、何の職務も爲す



なく、たゞブラ／＼して居るといふのでは、全く是れ造糞機に過ぎぬ。國家社會に對して相濟まぬ者である。そんな奴は一日も早くこの世をお暇乞した方が可い。他の語で云ふならば、「絶學無爲の閑道人。妄想を除かず眞を求めず」といふやうな人、即ち拙者常に閑なる人である。絶學といふのは、何も學ばないといふのではない。既に學び竭して今は學ぶ所がなくなつたのだ。無爲といふのも、何も爲ぬ土偶坊といふことではない。之れは爲ねばならぬ。あれは爲てはならぬといふやうなこともなく、而も舉手投足チャンと道に合ふて居る。孔子の「所謂心の欲する所に隨つて規を踰えず」といふ境涯の人のことだ、或は之れを無所求行の人とも云ふ。無爲の閑道人といふも同じだ。眞壁平四郎といふ人が悟つたときに面白いことを云つて居る「法身覺了無一物。元是眞壁平四郎」と、初からの平四郎では困る。法身覺了して見れば、別に覺了した平四郎が新に出來たのではない。矢張り元來の平四郎よ。といふので、悟りの悟り臭きは上悟りにあらず、悟つて居て別に悟つた風も見せぬ。凡人かと思ればすべて

の言行が道に合ふ。といふに至つて初めて本當の悟りである。是れ拙者閑なる底の人で、次の句の「本分の宗師」とは即ち本分の境域に到つて居る人を云ふ。然るに人は果して如何なる施設をするか、即ち如何なる説法教化を行ふか、それは本則を見て知るべきである。

藥山惟儼禪師は石頭希遷禪師の法嗣で、非常に廣く經文を見て悉く通曉せられ、殊に戒律を最も嚴重に守られた人である。所謂絶學無爲の閑道人、本分の宗師である。此の位の人だから就いて道を修めんと、其の會下に投ずる者も元より雲の如く集つて居た。トコロが「久しく陞座せず」藥山は長らく講座に陞つて説法せられぬ。説法せられぬといつて、座に登り口より耳に移す説法こそせられぬが、實は藥山は從晝至夜行住坐臥悉く説法せられて居るのだ。「眞實説く者は聲現せず」といふ句があるが、藥山は即ち此の聲の無い説法を常にせられて居たのだ。俗に不言實行といふ語は之れと似通つて居て、乃木大將の如きはその活きた例である。併しこの無聲の説法は無耳



の漢でなければ聴取することが出来ぬ。若し能く聴取せば、黙も猶ほ雷のごとく響く天皇といふ人、これも禪家の棟梁であるが、龍潭といふ師家の所に往つて三年間隨身した。或る時龍潭に問うて云ふには「師は隨身したならば必要の法門を聴かせると仰しやつたが、一體いつ聴かして下さるのか」と。龍潭「汝が隨身して三年、我は毎夜毎夜不斷に必要の法門を説いて居る。飯を食ふとき、茶を飲む折り會て之れを説かざるない。「なぜ聴取せぬか」ソコで天皇擬議す、何か云はうとすると、龍潭聲を勵まして「看んと欲せば便ち直下に看よ」と云ふ。是に於て天皇豁然として了悟したといふ。盲者の見ざるは日月の過にあらず、今薬山會下の大衆も悉く盲者であつたと見える。「院主白して云く、大衆久しく示誨を思ふ。請ふ和尚衆の爲に説法し玉へ」院主といふのは住持に代つて寺務を執る者である。久しく師の説法せられぬので、大衆一同飢えたる者の食を求むるが如く、渴したるもの、水を望むが如く、ひとへに師の説法を懇望して止まぬ、どうか皆の爲に説法して下さいと院主が願ひ出たのである。薬山

「ウム然うか、ては皆を講堂に集めろ」といふので俄に鐘を打つて大衆を集めた、大衆がいよ／＼集まると、薬山は講堂に陞つて、今や廣長舌を振はれるかと待ち設けて居ると、「良久して便ち下座、方丈に歸る」座に陞つたかと思ふと、やがて座を下りてサツサと方丈へ歸つてしまつた。「院主、後に隨つて問ふ」適來はさきつかたといふと院主は薬山の後に從つて、「師は先刻大衆の爲に説法せんことを許されながら、たゞ一言も出されずに、御歸りになるのは如何いふわけですか」と問ふた。薬山の一言を垂れざる所、即ち是れ千言萬語の説法なのである。聴く耳を具へざる者には解らぬ。一體云ふと陞座も下座も歸方丈も喫茶喫飯、運歩拈提、薬山に於ては悉く無聲の常説法である。薬山は全身説法である、此の外に別に説法すべきこともない。けれども會下の衆僧皆響の如く啞の如き連中で、薬山不斷の説法が解らぬ。それで老婆親切、敢て兒の爲に醜を現はして、陞座だの良久だの下座だの歸方丈だのと、丁寧なる説法である本分より見れば實に丁寧すぎるのである。それでも尙ほ大衆には此親切懇篤な